



成功は最後の一步

この間に答へて、

「我は何時でも、何か云はう／＼と考へて居る、又それを出来得るだけ、巧みに言ひ顯はさん／＼と努めて居る」
と云つたこの事である。

◆言心一致を主張す

言行一致と言ふ事は、道徳上動すべからざることであること云ふてもよい。言行の一致は最も貴ぶべき事である。言行の一致せざる言ふ事は、極力排斥すべき事である。しかしながら精密に之れを考ふる時には、多少の疑を生ずる言行一致と言ふ所は必ず行はなければならぬといふ事であるが、若し此の



意味に於ていふ時は人間は殆んどいふべきことがない。又言ふ必要もない事になる。言ふ事は必ず行ふとしたならば、行爲を以つてすれば足れるのであつて更に言論の蛇足を添へる必要はない。又此の解釋から見れば、今日の人は悉く言行不一致の人と言はなければならぬ、言ふ所は甚だ多い、又甚だ立派である。しかしながら其の行ふ所は之れを言ふ事に較ぶれば一小部分に過ぎない。且行のさほ立派なるものは、之を見るに少いのである、しかし人は悉く言行一致のものなりとして非難するものはない。然らば言行一致といふ事は、言は必ず行ふといふ意味ではないのではなからうか。言は必ず行ふ一致しなければならぬと言ふて責めるのは、或は無理ではないであらうか。

更に言行一致といふことを、時間の關係から考へるに、言ふたことは之れを成功は最後の一步



成功は最後の一步

言下に行はなければならぬといふことであるか。若し果して然らば、甚だ無理なことである。言ふや否や行爲が直ちに之れに従ふといふことはできることではない。如何に言行一致の人でも、其の言と行との間には、多少の時間がある。或は今日言ふたことを明日行ふこともあり、若くは数年の後に行ふ事もある。然らば言行一致といふ事は、實に棺を蓋ふて後に始めて言ふべきことではないか。しかも尙爲さんご欲して言明したが、遂に爲すことが出来ずして終ること云ふ事は、人生の常である。故に一生を通じて考ふるも、人は多く言行不一致に終ること免れない。

思ふに言行一致とは、言と行とは必ず一致すべしといふ意味ではなからう。言ふ事に反するが如き行爲を成さざるを言ふのであらうと思ふ。言ふたことの



中、また行爲に表れたるものが多くあつても其の言ふた事に反する行爲がなかつたならば之れを稱して言行一致云ふのであらうと思ふ。言ふ事は立派にして其の行ふ所之に反すしたならば、十分に責めてよいのである。言行一致といふことは之を文字通りに解釋すれば、前に述べた如く無理なことである。予は茲に言心一致といふ事の、道徳上必要なるを主張したいと思ふ、言ふことは必ず心にあることではなければならぬ。心にならぬ事は決して言ふべからず言ふ事である。言心一致とは之れを文字通りに解釋して少しも差支はない言心とは必ず一致しなければならぬ。言は自己の心にある事を發表すべきもの此の故に言の必要も生ずる。言行の場合には、前に一言した如く、行爲に表はる、以上は、言を爲す必要はないといふ理窟がある。言心一致の場合には心に

成功は最後の一步



成功は最後の一步

思ふ所を發表する爲めに言説を假るのである、心に思ふ所があれば之れを言説に表はさずして可なりといふ事はない、道徳上の原則として、言心一致云ふ事を強く主張したい、心にもない事を云ふのは、道徳上非難しなければならぬ。言心一致は言行一致よりも一層必要なことであらうと思ふ。

言心一致を以て人を責めるのは、如何なる場合に於ても無理なことはないと思ふ。之に對しては一の例外もないと言ふてもよい。而して今日人の多く心にもない立派なことを言ふ。今日人の言ふ所は殆んど善ならざるはない。けれども心に思ふ所、悉く其の言の如く善であるか云へば、決してさうでない。心にもないことを言ふは行はざることを言ふよりも、道徳上責むべきではない。翻つて考へてみるに、言ふたことに反するが如き行爲をなすのは抑も心に



もないことを言ふから起るのではないか。眞に深く心に信ずる所があり、而して後之を言語に發した場合には、之れを行ふべき機会に際すれば、必ず行爲になつて表れるであらうと思ふ、之れに反して心にもない事を言ふた場合には、他日之に反する行爲があらう。此の關係から心にもないことは決して之れを言ふ勿さいふのは、言は必ず行へ云ふよりも、一層根本的のことで且つ肝要ではなからうか。

◆吾人の生活の五類

仔細は世人の生活状態を視察するに、大約之れを五類に分つことが出来やう
一は最も排斥すべき罪惡生活にして惡を行ふて恥づることなく、自ら云ふ、人

成功は最後の一步



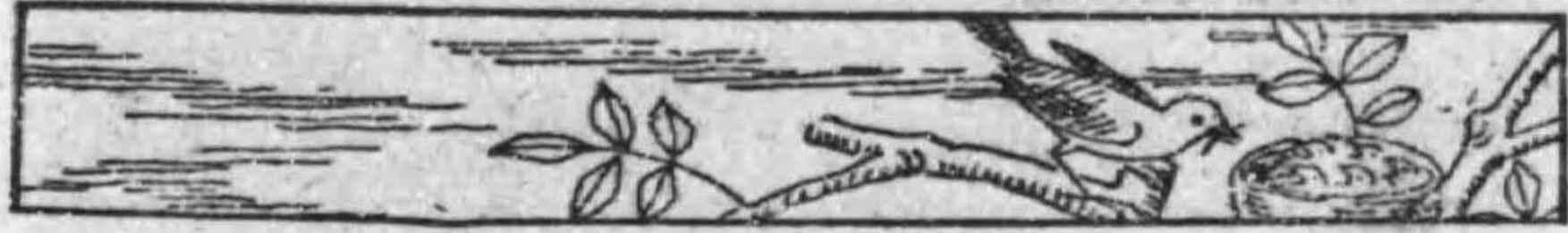
成功は最後の一步

生僅五十年、遂に死の運命を見るべくもあらず、營々として働いて抑も何かせん、寧ろ太く短く愉快に生を送るに如かず、彼等に道義の念慮なく、彼等に正義の精神ないのである、共同生活を害し進歩發達を妨げて獨り自ら樂しまうとするのである。彼等にして跳梁跋扈せんか、社會一日の安なく、國家には一舜の寧ないのである。此に於て法律なるものあり彼等を捕へて之れを社會に隔離し其の自由を奪つて惡業を遠うするを許さぬのもある。二は國法の罪人たらざるを以て生活法の範圍とし、法律にだに背かずんば如何なる罪惡を行ふても不可なるものにあらず心を得て、唯だ法に觸れざるを以て足れり爲す法律的な生活にしても亦未だ人生の本務に於て貢獻する所のもの云ふことは出来ぬ。國家は素より何等の制裁を彼等に施す能はず。雖も、社會の共同生活を害



するは少くないのである。殊に文明國の法律は正條に遵據して其の疑はしきものは之れを罰せざるが故に僅に一步の差によりて公然社會に横行せるものを生じ、法律之れを許すも社會に於て忌避せらるゝもの少くないのである。三は此の社會の制裁を範圍として人に誹られし譽められたしもの用意を以て生活するものにして滔々世間此の類最も多いのもある。彼等が善を爲すは名聞を得んが爲めである。彼等が惡を爲さざるは世評を恐るゝが爲めである。之れを前者に比較すれば優れることは數倍ではあるが、未だ以て人生の本務を悟りし道を行ふもの云ふことは出来ぬ。四は世評の如何に問はずして、社會の共同生活を助け、其の進歩發達を計るは人生の本務である。我れこの本務を行ふは、是れ人たる我れの當に爲さざるべからざることであるとなす者である。之

成功は最後の一步



成功は最後の一步

れを道義的生活に云ふのである。其の生活を簡易にするは自ら守る所を守るのである。其の努力奮闘止まざるは其の盡くすべきを盡くすのである。殆んど生活の上乗に類する。雖も、尙ほ一絲の其の間に蟻るあつて吾等の理想同じからずして、吾等は更に五の趣味生活に入らねばならぬ。道徳的生活には義務執行の思想ありて其の本務を完ふする上に於て聊かながらも苦痛の伴ふ感がある。趣味生活は此の苦痛より解脱し、本務遂行の上に愉快を感じるにあるのである。

◆道義生活と趣味生活

既に宇宙の大道を感得し人生の要路を看取す、吾等が生活の本義は明かにな



つたのである。吾等は生きんがために働くにあらずして働くべき爲めに生くるのである。其の働くは生存の爲めにあらずして道の爲めであればならぬのである。かく考へて来るに我等はこの生活を以つて一種の苦痛なりとは考へないであらふか誰れも働きたいに云ふものはない、遊んで居りたいに云ふのが人の常情である。それに對つて働かねばならぬに云ふのは強ひて厭ふべきことをなましむるので何の面白味もないことなる。人生はしかく無趣味なものであらふか。人生を斯く無趣味なものにすれば、生活は一つの苦痛である。吾等は此の苦痛を忍んで生活せねばならぬのであらふか。道の爲めに盡くすに云ふ名は立派であるが、我身に取つては苦痛ではなからふか、朝起きて云ふことは善いことであるが、眠い目をこすりながら起きねばならぬに云ふことは苦痛ではな

成功は最後の一步



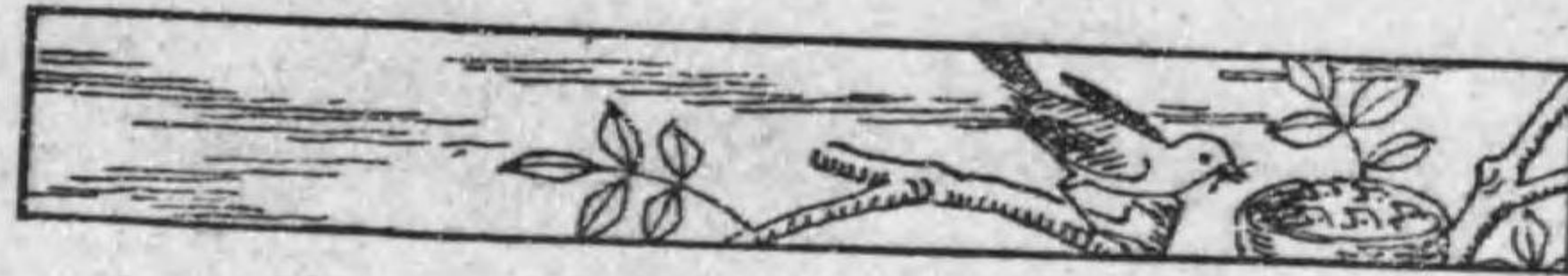
成功は最後の一步

いか、自身と思ふまゝに放恣なる生活をしてこそ楽しくもあれ、道を行はねばならぬ云ひ、道に背いてはならぬ云ふのは將に繋かれたる悍馬の如く全く自由を束縛せられて居るので、毫も樂しきことはいない古人が人生を苦の海云ひ、涙の谷云ふたのも無理なきこと、思はれる。併しこれは未だ修養其の功を積みぬからで、修養其の功を積んで我道一になつたならば思ふがまゝに道に順することになるので、朝起きはつらいことであるが、一日より二日、一月より二月、一年より二年、三年、四年と早起きの習慣を造れば自然に起きるゝ云ふ所にまで達し、此所に達すれば早起きをせねば不快を感じる云ふ様になる。かくなれば知らず識らず道に順することが出るので何の苦痛もないのではないか。かく云へば又其の修養功を積む云ふことが苦痛である云



ふ人もあらふ、然り強ひて狂ひ易き心を止め散じ易き妄念を抑へて精神を修養する云ふことも苦痛云へば苦痛である。されど、それは其の當初のみの苦痛で、これを繼續して行けば慣性となつて苦の苦たるを感じぬやうになる。繼續して行けば苦の苦たるを感じぬやうにならふ、で其の當初は既に苦痛でそれを繼續するのも亦苦痛ではないか、云ふ人があるであらふ。論歩も、まで進んで来れば直ちに根本義を明かにすることが出来る。元來苦云ひ、樂云ふのは其人の心の持ち様で、爲さなければならぬ義務であること感すればこそ苦痛であるが、喜ばしや今日も亦かく爲すことが出来ること思へば快樂である。朝早く起きて今日も亦働かねばならぬと思ふからつらいのであるが、今日は一日遊び暮らすことが出来ること思へば自然に朝早く起きらるゝではないか。道を行

成功は最後の一步



成功は最後の一步

ふこ云ふこを義務と思ふから苦なので、權利と思へば樂である。これが道義的生活と宗教的生活と異なる所で、道義的生活は義務であると思ふて道を行ふのであるが、宗教的生活は權利であると思ふて行ふのである。權利と云ふのは少しく穩當な辭でないが先づ一應はかう見るこゝが出来る。更に適切なる語を以て云へば、道義的生活は義務の生活であるが、宗教的生活は感謝の生活である生を此天地は受け自から其花育を助くるの業と勵むこゝを得る。此に於て之れ何の幸ぞやと感じて行くので、厭やくながら行ふのでなく、樂しんで行ふのである。樂しんで行ふこ云ふ中に生活の趣味は存するのである。

趣味生活は宗教生活なり。其の簡易生活に於ても唯だ努めて己に克り、強ひて慾を制するのみならず。其の克己性慾の上に無限の趣味を感じ。



何のその百萬石も筐の露

喝破する安心の一境を拓き、

我が心秤の如し、人の爲めに低昂を作す能はず。(諸葛孔明)

毀譽の外は超然たる見地を養ひ、其の努力生活に於ても、人を相手させずして天を相手とし、不斷の力行に無上の趣味を感じ、道を行ふを以て嚴格なる道徳上の命令に出づこは思惟せぬのである。

「義務を以て寧ろ親切に且つ慈悲ある母の如く、常に吾等と冥福護して此の世界の中に於て憂慮なからしめて平和を與へんこするものなり(ラボック)と思惟し、感謝 怡喜悦の情を以て之れを遂行する所に、眞に生活の趣味を感じ得るのである。苦樂は悉く汝の心になり汝の心にして歸差を得んか、煩悶懊惱なく消えて吾等の心をして安からしめ吾等の生活をして趣味あらしめ得る

成功は最後の一步



成功は最後の一步
のである。

●趣味的生活の要素

生存競争優勝劣敗の社會生活を圓滿ならしむる同情、これ實に趣味的生活の要素である。乾燥無味なる社會も之れあるが爲めに、春風駘蕩の和樂を得、賤が伏屋の佗住居、親は子を、子は親を夫は妻を。妻は夫を相想ひ相慕ふ中に和氣の霽々たるものあり、金殿玉樓の裡も親は子を疑ひ、子は親を疎んじ、夫は妻を忌み、妻は夫を嫌ひたらんには秋風蕭條、生活の趣味何れにか求むべきである。源義經の屋敷に戦ふや、其の臣佐藤繼信彼れに代はりて能登守教經に射られたのである。義經繼信の手を執つて云ふ、



「主となり、家來なる宿世如何なる縁にてありけん、死なば諸共思ひしに汝を先き立つるこそ遺憾なれ」

こ、繼信莞爾として。

「抑も始めて國を出でしより命は君に捧げしに、今、君の御身に代りて死するこ、繼信、身につて此の上の喜びやあるべき」

こ、主は臣を、臣は主を相思ふ所に殺伐なる戦記に一枝の花を添へたのである
俳諧師松雨の妻が、

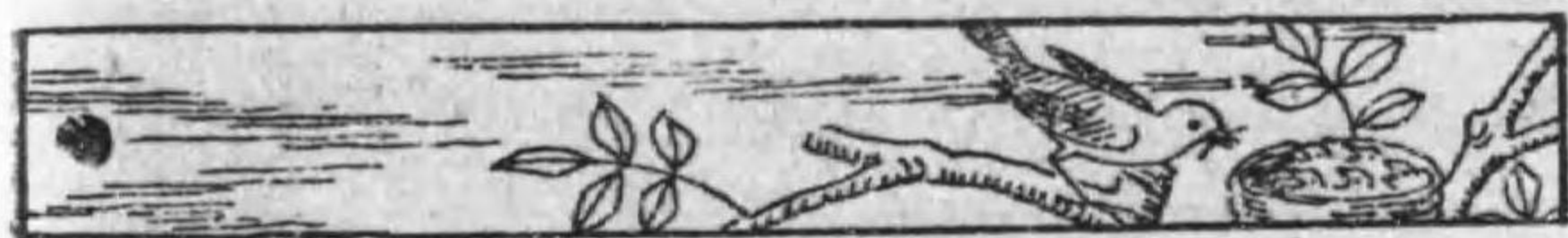
吾が子なら伴にはつれじ夜の雪

この一句は同情の念溢れて今尚ほ人口に膾炙し。

思へたゞ使ふも人の思ひ子を

我が思ひ子に思ひくらべて

成功は最後の一步



成功は最後の一步

の教訓は人心の秘奥を突くものある。人々との關係は此の同情によりて初めて趣味あり、吾れ同情を以て人に接す。何人か動かざらんやである。蓋し社交の快樂は此に在り云ふべし。マアカス、アウリア云ふ

『汝は己を樂しましめん欲せば汝と共に生活する所の美德を思ふべし何となれば美德の我が知れる所の人に於て顯はるゝを見るより樂しきはなし』

ミ、同情の普及は唯だ人々との間ののみならず、これを一切の動物に及ぼしてやれ打つな蠅が手をする足をする

瘦せ蛙まけるな一茶こゝにあり

ミ、云ひ又

行水の捨て所なし蟲の聲

てすりにもたれて化粧の水を

(兎 貫)

(同 茶)



何處へすてよか蟲の聲

(高杉晋作)

ミ、これ實に徳禽獸に及ぶの慨がある。是れを植物に及ぼして、

朝顔に釣瓶さられて貰ひ水

(千 代)

ミ、云ひ、此の觀念を擴充して一切萬物に及ぼし、

『おもしろや散るもみぢ葉も咲く花も

おのづからなる法の御婆』

ミ觀するに至つては、天地を以て趣味の顯現、同情の一塊にして、我が日常生活に無限の趣味を感じしむるのである。

◆痴人盜賊も美裝せは立派に見ゆ

夫れ金錢は金錢として尊むべきものにあらすして、或は日用の費途に供せら

成功は最後の一步



成功は最後の一步

れ、或は事業の資本として使用せられて、初めて其用をなし其の價値を認めらるべきものである。然るに世人我は金錢の價値を妄信し、只管之れを蓄積せんここにのみ熱中して其の利用すべき物であることを知らざる者がある。斯くの如きは即ち金錢を使役すべくして却つて金錢の爲めに使役せらるゝものにして眞に憐笑するに堪へたることである。

抑々吾人が一ヶ月間若しくは一生の間に必要とする所の金錢には自ら極度ありて、此極度を超えて之れを費消すれば百弊茲に生じ、遂に其の人格を傷ぶに至るべきこと、恰も劇毒藥が一定の分量までは樂品としての効能あれども、其の極量を過ぐれば却つて身體に有害なるが如きである。巨萬の富も死後は自己に何等の用なきのみならず。却つて後繼者を累するの例甚だ多いのである。縱



由一錢の遺産なくとも、後繼者にして其人ならんには遂に家運を恢にすべきや必然のこゝである。由是觀之、彼の生涯離離として金錢の奴隸となりて蓄財にのみ腐心しつゝある者の如きは、其の何の心たるを解するに苦しまねばならぬのである。若し夫れ黄金の光輝く所廟堂の權貴も尙其の頭を屈するを見て金錢萬能を信する者あらば、以て與に語るに足らぬのである。假令金錢の力は如何に偉大であるにしろも、そは畢竟拜金者流の皮想の觀察にして、金錢に依つて人格を上下するに足らぬのである。痴人盜賊の輩も美装すれば猶立派に見えるものである。意氣揚々として街路に馬車を驅り自動車走らす者若し其人にあらずして徒らに金持たるに過ぎざれば唯一笑に價するのみである。吾人は金錢以外に必ず貴むべきものあることを知らねばならぬ。

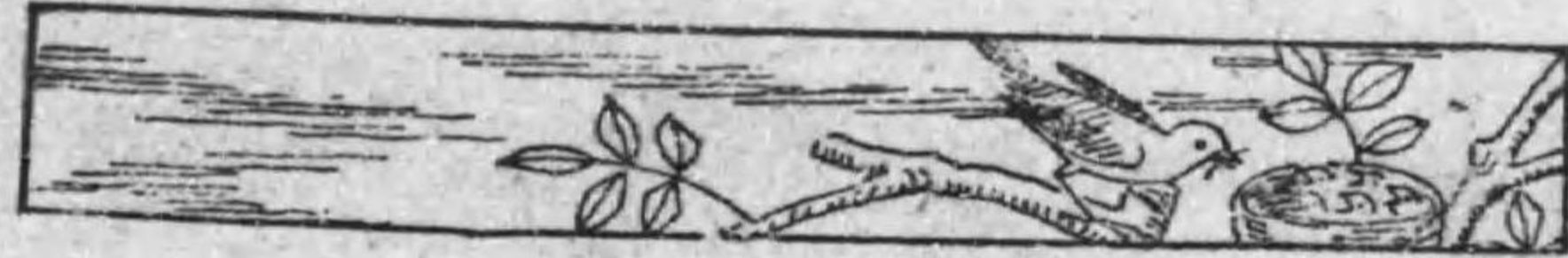
成功は最後の一步

宅に柱なければたもたず、人に魂なければ死人なり (日蓮)
心のつたなき者は心を動かして身を安んず、上智の人は心を安んぜず、なべての人の安んずべきを苦しめ、苦しむべきを安んずるが故に、一生心のまゝならず

(赤染衛門)

◆赤むへきは金錢爵位にあらず

古より孝子節婦は窮乏の家庭に現はる、吾人は往々垢塵に塗れ油に穢れたる青服の仲間に感服すべき人物を見出すことがある。彼等は固より金錢に乏しく才學も亦多く之れを有せざるに、吾人が其の天真の人格に打たる、の時は尊敬の念を禁ずる能はざることがある。之れ即ち品性の榮光である。假令身に



垢塵を附け襤褸を纏ふも人をして崇高ならしめざるものは即ち品性である。實に尊むべきは爵位にあらず、金錢にあらず、財寶にあらずして、極善極美の品性である。故に諸子が處世の大方針として先づ此品性の修養に努むべきである。諸子にして品性なきの人ならば如何に俗界の功名を博するも以て尊むに足らぬものである。畢竟品性は人間第一の寶である。

ローレンス曰く

『富よりも品性を取れ、假令全世界の富を得るも汝が品性の總べてを失はし。』
『何等の益あらんや』

◆無錢の邊に安心を定めよ

福澤諭吉翁は諸子も知らるゝが如く實利を重じたる人である、然れども翁は成功は最後の一步





成功は最後の一步

又品性高潔なる大教育家であつた。故に翁は實利を重んじながらも金錢の外に至寶あることを説いたのである。思ふに翁が實學を尊び實利を重んじたるは、當時封建の餘弊として「武士は食はねど高楊枝」云ふが如き氣風ありて、金錢の勘定をも知らざるを以て却つて名譽を爲めに國家を貧弱ならしめ、遂に世界の競争場裡に堪えざるに至るなきかを憂へたるものならんか、翁が金錢以外の寶に就て説ける所大に味ふべし、曰く、

世に所謂錢一方の人にして錢の方に他志なしと稱する者にも、獨り自ら其身を省みて己が處世の得失如何を勘考し、世人の己れに對する交際法、厚薄如何を觀る時は、何か物足らぬやうに思はれて多少の遺憾あるは傍より推察して事實に違はざる可し。



こ、「何か物足らぬやうに思はれて」こは穿ちたる詞である。世の貧乏人は一途に富限者たることを希へども、富者必ずしも心に満足するものにあらず。故に翁は右の所説に引續いて、世の所謂金満家が衣食を美にして邸宅を壯にし時に或は一擲千金の豪奢を逞ふするは、獨り自己の快樂の爲めのみあらずして、何か物足らぬやうに思はるゝ、其の不満足を慰せんが爲めなることを説いたのである。翁は尙諄々として説て曰く

『我輩の本願は尙一步を進め、天下の人をして全く錢を離れ無錢の邊に安心の點を定めて自ら名譽の大なるものあるを知らしめんと欲するなり。即ち其安心の點は人生の智識徳義才力品行等の箇條にして、之れを支配するに不羈獨立の氣概を以てするときは、發して處世の交際法となり、居家の快樂事となり威武も恐るゝに足らず、富貴も羨むに足らず、心は天下最高の

成功は最後の一步



成功は最後の一步

點に安んじて、身は熱界の俗塵に交り(中略)迫らず急がず悠々自ら居るこきは、古歌に云ふ「色をも香をも知る人ぞ知る」の道理にて自ら世間の尊敬を博するや疑ある可からず」

こ、眞に翁の本領たる獨立自尊主義を發揮して餘りあるの言を謂ふべし。翁は又智識徳義才力品行を併べ舉げたれども、品性徳行を以て最も大切なるものとするこは言外に自ら明かである。所謂先哲欺かざるもの歟。

自省みて悪友を説く勿れ

孔子は、

益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣。
友便僻、友善柔、友便佞、損矣。



こ云へり。是れ或程度まで益友損友の別る、所なれど、直も諒も多聞も單純ならず、便僻も善柔も便佞も單純でないのである。直の如くして直ならず、諒の如くして諒ならず、便僻の如く便僻ならず、善柔の如くして善柔ならず者がある。一見して性格を辨識し得るなきに非されども容易に辨識し得るもの少くないのである。

孔子は、

吾れ言を以て人を取る、之れを宰了に失す、貌を以て人を取る、之れを子羽に失す。

こ云へり。輕々しく人を選択すべからざるこは以て知るべしである。世には善人悪人があるに相違なきも、中には偽善偽悪を云へるありて、善も偽善

成功は最後の一步



成功は最後の一步

悪と偽善とは之を區別するこはなかく容易でない。悪友と交はらざらんご欲するも、悪の或は偽悪ならざるを必ずすべからず。偽善は偽善より多くはなけれども、著るしき偽悪こそ少いのである。部分的偽善はしばく見る所にして、彼の磊々落落を任じ居るものは概ね此の類である。繩墨を以て律すれば批難すべきもの多けれども、批難すべき間、一分愛すべく敬ふべきころ無ではない。

逆境は友を量るべき唯一の秤なり。

こは、ブルタルクの言である。逆境に在る時、敢て手を延ばし救ひ來るは、偽善者ならずして、却つて偽悪者なるの例に乏しからず。

友の善悪は、己れ自身に因りて定まるこが多いのである。官吏は商人と交



りて貨殖の途を知り、動もすれば暴富を計らんごするも其の故を以て、直に商人を惡すべきものでない。商人は茶の湯義太夫の師匠と交り、職業を忘るこもあるも、其の故を以て、師匠連は惡であるこも云へぬ、中には真に便佞邪僻其の誘ふに任せたならば、何處に及ぶの測り知るこが出来ぬけれども、是れさて、此に應ずるの縁あるが爲めであつて、縁なくば何事も起らぬのである孔子佛性招きに應ぜんごす。子路曰く、

君子は不善を爲す者ご共にせず

こ、孔子答ふらく、

「然り、而も堅きを日はすや、磨すれごも燐せず、白きを日はすや、涅すれごも緇せず」

成功は最後の一步



成功は最後の一步

こ、瓢瓜の例を引きし所、稍々疑ふべきを覺ゆるも、不義を爲す者共にし、自ら其の不善に染まらざるを確信するは、豈に君子の君子たる所ならずや、悪友と交るを恐る、は、自ら悪友に感化せらるゝを慮るもの、本来悪友と相ひ距る僅に一二歩であつて、辛うじて悪人たらざるのみさる、薄弱なる性格を以て正道に處し、何等の事を爲すに堪へんやである。須らく悪友の害を考ふるに先だち、自ら戒むるが必要である。

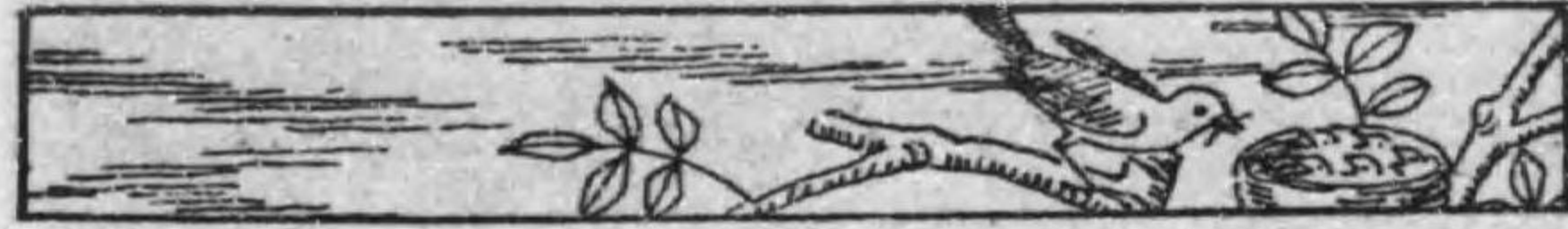
吠ゆる犬は子獅より必要なり

一の事業を起し、又は事務をなす以上は、十分の活動を要する、即ち自分の力のあらんかぎりをつくして働かなければなりません。まだく働きを爲すべ



き餘裕があるのに、其れを残しておく必要はない。十分に自分の働きをつくらなければなりません。それが今此處に活動云ふて居るものであります。活動は我々實際此の世に於て生命ある徴でありまして、又これが生命の基であります。これなくして到底成功の得られやう筈がありません。所が世間の人は、種々様々でありまして、中には誠に正直でありますけれども、平生引込思案で、余り活動をなさないやうな者があります。其の正直である云ふ事は、固より稱揚すべきでありますけれども、其の引込思案の一方に偏するといふ事は、取るべからざる事でありまして、昔はいざ知らず、今日の如き競争の烈しい時勢に處するこゝに、なつては、吾々人類は各々其の特種の能力をあけて、社會の實際の需要に應じて來なければなりません。古人が「人知ラズシテ慍ラズ」とい

成功は最後の一步



成功は最後の一步

つて居りますが、成程他人が自分の才能を知らないでも、それを憚るこゝもなく唯一人徳を修養して居るこゝいふやうなこゝは、感心なこゝである。併しながらさうも左様にすまし切つて隠居して居るこゝいふに至つては、或は折角の勝れた智識若くは道徳を有しながら、埋没しをはるやうなこゝがないこゝも限らない。もし左様なこゝがあつては其の人の爲めに損になるばかりでなく、そもくまた社會の爲めに不利なこゝである。ウオシントン、アーヴィングが、斯ういふ事を云つた。『犬の吠ゆるものは却つて獅子の眠れるより有要なるこゝあり』と、眞に名言である。

◆卑しき我を高尙ならしむる唯一の方法

『なくて七癖』といふ故に、『人こゝに一つの癖はあるものを我には許せ敷島



の道』と詠みし人あり。何か一つは癖なきを得ないものならば、出来るだけ善き癖をつけるべきである。

まだやうやく三四寸のうちに枝幹に善き癖をつくれれば、四五年の後には木なりよき庭木を作ることが出来る。善は急げ、鐵は赤熱のうちに鍛ふべきである。『むかし 그리스に笛の名人ありしが、入門する者ある度に『今までに笛を習ひしか』と尋ね習ひたりと云へば『さらば月謝は二倍ぞ』といふ。其の譯を問へば『癖なきは白き石盤の如し、何を書かうとまなれど生中惡しき癖のつきたるは汚れたる石盤の如し、汚れをふき取る面倒の月謝を要す』と云つた。

『癖をやむるは齒を抜くよりも痛し』といふ諺がある。成程癖はやめにくいものである。されど少年時代の癖は年月も高の知れし虫ぐらるのものなるを、痛



成功は最後の一步

くもも忍耐してぬくべきものである。
 癖のつくは雪の積るが如し。ちらく舞ひ降る間は何の事もなけれき、積りて山一面に雲となり雪なだれとなりてすべり落つれば、家をも村をも押し潰し、数百の人畜をも押し殺す。初めは蜘蛛の絲ほご習慣も、後には罅網の如くなりて人の心を縛るのである。
 およそ癖の中にて悪しき癖に克つ癖ほご善き癖はない。此の癖ある人は限りなく進歩するのである。
 悪き癖にもいろくあれき、唯目の前の小さき卑しき慾のみにかぶれる卑劣なる癖、薄志の癖、なまけ癖、最もあしきは自分勝手一方の癖である。それらに克ちて少しにても善き方。高尚なる望を遂げんとするを克己といふ。



成功は最後の一步

すべて悪しき癖に打ち克は克己なり、煙草を禁じ、間食を禁ずるも一つて克己である。なまけ癖、あそび癖、そねむ癖、ひがむ癖に打ち克つも克己である。怖ろし。恥かし。悲し。つらし。と思ふ心に打ち克つも克己である。
 後光明天皇の雷を怖る、心に克ち給ひしも、伊能忠敬が好める碁をやめしもデモステネヌが悪しき發音癖や姿勢を矯め治しつゝも克己の力なり。水戸の學者青山延光は生れつき内氣にて、目上の人の前にては思ふやうに口も利けざりしを恥ぢ、自ら佩弦齋を號して常に弓の弦を張れる如く凛としたる氣象を持たんミ力めて成功せり又會津の學者章軒は我が剛氣に過ぎて人ミ争ひ易きを憂ひ常になめて皮を帯に揮みて腹の立つ折はこれに手を觸れ、其の柔かなるを思ひて怒を抑へ、遂に柔和なる人ミなつた。フランクリンは節制、秩序、儉約、勤



成功は最後の一步

勉、誠實なさいふ徳の表を作り日々我が悪しき辭に打ち克つ事をつこめた。
克己は小さき卑しき我れを大いなる高尚なる我れをなす唯一の方法である。

◆怒するは最上の返報

他人が我れに害を加へた時如何にすべきかといふに、これに對する方法が三つある、怒すか、罰するか返報をするかである。

怒すは害を加へた者を憎まず、怨まず、打すておくことであるおのが身に省みて、我れだてて嘗て同じ様なことをした覚えがある今尙腹の立つ時なきに又もしかねないから、人ばかり咎めるには及ばぬ、ミ害を加へられたことを忘れてしまふのを怒すミ云ふのである。



されど又時としては、其の儘にして棄置けば、其の者ますます増長して我を悔り、或は更に他の人々にも害を興へるこゝがないともいへぬ。こんな場合には一つは富人を誡めるため、一つは後の豫防にも相當の罰を加へるこゝがある。されどこれは誰でも出来る事でない、父母ミか、監督者ミか、教師ミかに限るこゝである。同輩罰しあふべきでない。止むを得ぬときは、其の權利を有する人に訴へ出で取締らしむべきである。

罰する場合でも、其の者が改心すれば、悉く罰を恕してやるこゝ勿論である。

返報は復讐である。罰は全く異がふ。罰は其人の爲め、世界の爲めに余儀なく課するものであるが、返報は血で血を洗ふのである暴を以て暴に易へるの

成功は最後の一步



成功、最後の一步

である。互に怨を重ねるばかりで、いたちごつこである「殺しや殺される、その殺した者を又殺す」ミ西洋の諺にある通りで、孟子に「これを戒めよ、これを戒めよ、爾に出でたるものは爾に返る」ミ又諺に「人を呪はば穴二つ」ミいふのも、皆同じ理を云つたのである。むかしは仇敵討ちを美德と云つた時代であつたが、其れは政治の十分行き届かない頃である、今尙曾我兄弟、四十七士等を譽めるのは、其の志をほめるので敵討其の事は過去の悪習である。唯一言でも目色ばかりでも、悪意の舉動に對して悪意を含ませた舉動をするのは、返報の類である。雙方の不爲なるも利益なる事は少い「恕すは最上の返報」ミいつたのは、情けに及向ふ武器のないことをいつたのである。相手の悪意を燃える火に喩へれば、返報は其の火を熾ならしむる薪である。訓



は時として水である、一度は消すことも時たてば又燃え上る。自然に全く消え盡すやうにするは、思ひやりにもミづく寛恕の力あるばかりである。

二宮尊徳が嘗て、天道ミ人道ミを示したる語に、

『田圃の荒蕪するは天道自然たり、この耕耘の怠らざるは人道也、衣服の弊汚に至るは天道自然なり、之を製するは人道なり、居室の破損するは天道自然也、之れを造作して怠らざるは人道なり、人心放僻邪僞に流る、は自然也仁義禮讓を以て之れを教へ、之を防ぎ怠らざるは人道也、故に人道の要務は、私慾を制してよく勤勉し、節儉を守り仁義を行ふにあり、斯くの如くんば作爲の道全ふして永久事患なき也』ミ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

◆ 當にせらるる人となれ

十人の見る所、百人の指す所にて、なにがしは慥かなる人なり、たのもしき人なり。此の始末をたくしても必ず間違なからむ。この仕事を任じて、必ず成就することなからんこ、豫め世上一般より望をかけらる、人を稱して、人望を得たる人物といふ。

凡そ人間世界に、人望の多少輕重はあれども、かりにも人に當てにせらる、人にあらざれば、何の用にも立たぬものである。その小なるを云へば、十錢の錢を持たせて、使にやる者も、十錢だけの人望ありて、十錢だけは人に當てにせらる、人物である、十錢より一圓、一圓より千圓、萬圓、遂に幾百萬圓の元



金を集めたる銀行の支配人となり、又は一府一省の長官となりてたゞに金錢を預るのみならず、人民の便不便を預り、その貧富を預り、その榮辱をも預ることあるものなれば、かゝる大任に當るものは、必ず平生より人望を得て、大に人に當てにせらる、人にあらざれば能はざるのである。

人に當てにせざるは、其の人を疑へばなり、人を疑へば際限もあらず、目付に目を付くるために、目付をおき監察する爲めに監察を命し、結局何の取締もならずして、徒に人の氣配を存じたる奇談は、古今に其の例少からず、又三越白木屋の品は、正札にて大丈夫なりて、品柄もあらためずして、これを買ひ、馬琴の作なれば、必ず面白しめて表面ばかりを聞き、注文する者多し、故に三越白木屋は、益々繁昌し、馬琴の著書は益々流行して、商賣にも著述に

成功は最後の一步



成功は最後の一步

も甚だ都合よきことあり、人望を得るの大切なるは以て知ることが出来るのである。

神は自ら助くる者を助くと言へる諺は、確然経験したる格言なり、僅に一句の中に歴く人事の成敗の實驗を包蔵せり、自ら助くこと云ふことは、能く自在自立して他人の力に倚らざることなり、自ら助くるの精神は、凡そ人たるもの、才智に由りて生ずる所の根源なり、推して之れを言へば、自ら助くる人民多ければ、其邪國必ず元氣充實し、精神強盛なることなり。

◆吾等の祖先に學へ

明治天皇の御製



「大空のそびえて見ゆる高ねにも
のほらばのほる道はありけり」

教育は學業を修めて、知識を開き、また既に學びたるを温めて品性を養ひ良習なすことなり、學問は天地の極むも、其の品性に高尚ならずんば、人の人たるべき資格あるもの謂ふべからず。學問は末なり、品性は本なり、本を忘れて末に馳せなば、人はたゞ學問の機械たるに過ぎないのである。智能を啓發し、徳義を成就し、快潤なる氣象を練り、賢實なる思想を養ひ、以て己を全うし他を益すること、眞に人たるの道を得たりと謂はなくてはならぬまた人に重んずべきは常識である。常識は善を善とし惡を惡とし、公平なる識別を爲すの謂にして、人生の確實なる指針である徒らに愛憎の念に驅られ、

成功は最後の一步



成功は最後の一步

境愚に役せられて、偏狭の性を養ふてはならぬ。

我等が祖先は今日の進歩せる學問技藝を知るこゝ能はなかつたのである。我等が如く立憲帝國の恩澤に浴するこゝが出来なかつたのである。されど能く其の廣大なる人格を養ひて、至誠一貫、常識に則りて、身を修め、家を齊え、君國に盡し以て日本民族の雄志美德を發揮したではないか、我等にして若し品性陋劣氣宇狭小にして私利に流れ、名聞に耻て、仁義忠孝の道を誤りなば、上は陛下の聖諭に悖り、下は祖先の遺徳を汚して、天下の選民たるの天職を賊ひ大日本帝國の品位を傷くるに至る。

冥々の志なき者は照々の明なく、婚々の事なき者は、赫々の功なし。

(荀子)



夫れ衆人は多く物を營みて其の力を苦るしめ其の心を勞す故に困しんで膽らず大なる者は以て其の國を失ひ、小なる者は以て其の身を危ふす。

(管子)

◆事の成ると成らざるは根氣による

竝の人も心を錬えなば傑れた人となる事が出来る。生鐵を鍛ひて鋼鐵となし利き及物となすに同じである。心を鍛ふは心に善き癖をつける事である。人に最も必要なるは、根氣をつむる癖である。根氣をつむるは氣を散らすして或一つの事に熱心することである。

根氣は人となるための根本のよき癖である。不器用なる者も、根氣さへあれ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

ば、失望するに及ばず、下等動物でも根氣ある者は教育する事が出来る。犬に使をさせ、象に藝をさせ、猿、雲雀に芝居をさせることの出来るも、教を授くるだけの根氣があればである。白痴の一生白痴に果つるは生れつき根氣のない爲めである。白痴は四五歳になつても赤兒のやうである。飲み喰ふためにさへ手足を動かさずして物を見ても長く視ず、起たず歩かず。据られたる處に何時迄も眠り、物を投げつくりも拂はんこもせないのである。なし得ざるにあらず、根氣がないのである。白痴は一生白痴にして果つるのである。

小兒の大人に劣るも、野蠻人の文明人に劣るも第一は根氣の劣るが爲めである。野蠻人は大概或一の事或一つの物にじつこ心を注ぐ事を爲し得ぬものである。あき易く、氣を散らし易い。小兒もさうである。幼き時は兎角心が浮つ



き易い故見聞きした事を直ぐ忘れるのである。解らぬこいふのも根氣をつめて考へないが爲めである昔より人間の立派なる仕事は、元をたせば大概根氣の力である。アークライトが紡績機械を發明せしもデュニナアが種痘術を考へつきしも、モオスやホイーストン等が電信機を造つたのも、半分方は根氣の力である。ニュートンは『予の他人に勝るは注意力の一點のみ』とさへ言ふた。

根氣あればそのみにて足れりこいふではない。されど根氣さへあつたならば、兎も角も教を受くること出来、習ふこと出来る故生れつき愚かなる者も十人並みなるのである。根氣はアイウエオ五十音を習ひ得たるに比すべし五十音だけ十分書くを得たならば、先づ一通りの手紙位は書かる、道理である。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

人の一生は、特に心志の勞苦或は、肢體の勞苦に由りて果實を結ぶことあり、奮勵して又奮勵す、斯くの如きは人生なり予は年來斯くの如く踏み行へり、天下の事吾が勇氣を傷ふるものなし、蓋し人間は一箇強猛の精神を一箇正短の目的を以て何事をも成就し得らるべきなり。(シエツファー)

◆人事を盡して天命を待つ

農業は人をして健全ならしめる、總ての人は樹木と同じく、太氣中に生活せなくてはならぬ。而して農業の生活は概して戸外的なるを以て、最も此の目的に適へるものである。

農業は人をして著實ならしむるのである。「人事盡して天命を待つ」云ふ



妙諦は、手を農業に染めてはじめて能く之れを了解すること出来る。如何に性急なればこゝて、播きたる種の、直ちに實らむ事を望むものはない。又如何なる奇法があるも播かぬ種の生すべき理はないのである。人、若し、此の間に身を置かば、如何に自然的作用が天然に於て、大功なるかを知ることを得て、而して、更に人事の上に應用するの道を悟るに難くはないであらう。

農業は人をして科學的精神を養はしむるのである。夫れ農業は常に天然に接するものであるから、其の發達、其の變遷、其の活動の妙機は仔細に之れを觀念する事が出来る。而して其の間に自ら因果の理法の整然として動すべからざるものあるを會得する事が出来るのである。

農業は人をして美趣に解し詩情を養はしめる。支那の陶淵明は嘗て其の詩興

成功は最後の一步



成功は最後の一步

を田園に養ひ、その詩才を農業によりて而して千古の大詩人なることが出来たではないか英のオーズウオースも、亦其の詩趣を無名の野花、幽草の上に訪ねて、天地の妙機を詠唱して、其の大詩人たる名譽を擔ひ得たではないか。農を本業とせず、固より可なり。而してこれを餘業とせずには何人にも、容易に之れを行ふ事が出来る。掌大の庭園も、數株の花木を培養するに於て、餘りあるではないか、一畝の田畑も、所謂臺所庭園たるに於て、不足なきにあらずや、況や、彼の地方に別所を有する。紳士豪商輩に於てをや、これほど容易のことはなかるべく、又、これほど愉快なものはないであらう。之れを彼の鳥獸を、殺戮して、以て一時の快を貪る、銃獵の如きものに比すれば、其の趣き、其の樂豈唯に霄壤の差異あるばかりではないか。



引力を發明し其の名古今に轟くニュートンは非常に篤學の人にて、其の學に専念する時はしばしば、食事を忘るゝにぞ、婢、之れを慮りて幾個の雞卵を鍋と共に書齋に持ち行きて、之れを半熟にして御都合の宜しき時、隨意に食したまへ云ひ置きて出で去り、や、時經て行き見しに、將に食事せんとする時に、ニュートンは右手に雞卵を持ち、左手には尙ほ書を放たず、讀み居れるに『何ぞて早く鍋に入れたまはぬ』と鍋の蓋を取り見れば鍋の中には懷中時計が湯の中に踊りつゝありしと、こはニュートンが心を書中に奪はれて時計を雞卵と思ひ違へしなりと。事、頗る笑ふべきが如しと雖も、以て其の篤學を想ふべきにあらずや。

健全なる社會の二要義

然諾を重んずるこいふ事は、一の美德である。一旦約束したことは必ず之れ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

を果すといふのは、道徳上から言へば、當然の事であるしかるに昔から士は然諾を重んずるといふ語のあるのは、寧ろ我が社會の道徳の低いことを表はすものでないか。而も今日は相當の地位にあるものも、尙ほ且然諾を重んずるといふ點に於て大に缺けて居る。若し然諾といふが如き改まつたむづかしい言葉を以つて形容せざる事をあけて言ふときは、即ち約を違へ、承諾したことを實行せず。默諾した事を履行しないといふが如きに至つては實に枚擧に遑がない。商業上に於ける信用のない言ふ事も即ち其の例である斯の如きは道徳上甚だ遺憾である。又之れを歐米の社會に較べて甚だ恥づべきことある。

何故に我國に於ては然諾を重んぜないのであるか。約束を堅く履行しないのであるか。商業上の信用が乏しいのであるか、是れに對する解釋は種々あらう



こおもふけれども、一には容易く然諾するといふことが即ち之れを實行しないといふ結果を來すのであらうと思ふ。元來我が國の人は容易く然諾もなして拒絶をなす事は滅多にない、然諾に拒絶は相伴ふものである。履行するの意なきこと、又は履行するを欲せざる事は、斷然として之れを拒絶し、其の履行に意あり、履行せんことを對して然諾する、斯くの如くなれば然諾は自ら重んぜられるのである。然るに何事に拘らず他の要求に對して拒絶をせず或は明々の間に、或は暗黙の間に然諾す。是に於て然諾した多くは之れを顧みない。否顧みるこゝが出来ないといふことになる。他の要求に對して明かに拒絶を表はすは、其の感情を害するが如き感あれども一旦承諾して之を履行せざるに較ぶれば、其の感情を害するといふ點に於ても、前者は後者よりも大であ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

る。予は我が國人が種々の場合に於て明かに拒絶を表はするに至らんことを望むのである。是れやがて然諾を重んずる所以であらうと思ふ。

拒絶を表すことの出来ないのは、意思の薄弱を意味するに相違ないが、我社會もまた拒絶の表明を許さない事情があると思ふ。卑近な例を擧ぐれば或は演説を依頼し來る場合に、何等の考案もないから斷ずるも之れを許し得ない。演説を爲さんとするに當り、考案なし云ふのは、最も明瞭な拒絶の理由ではないか而かも社會は之れを許さない、差支あり断るも、何ぞか練り合せて是非爲せし迫るのである。甚だ無理なところではないか。集會の通知書には多くは萬障繰合せ來會せよとある。差支なき限り來會せよといふのは聞えて居るか、たゞひ形式的にもせよ、我が社會は拒絶を承認しない。其の結果然諾を重んぜ



られないといふことになる。之れを數量的に言へば、五つの場合に於て然諾を表するならば、五つの場合に於て拒絶を表するやうになりたい。否過半数の場合に於て拒絶を表し然諾を表するに、十中一二の場合に於てするやうにならんことを希望する、而して一旦然諾したところ如何なる場合でも之れを履行するに至らんことを希望する。然諾のみあつて拒絶なき社會は健全な社會ではない。道德的の社會ではない。杜甫の詩にかういふのがある。

「手を翻せば雲を作し手を覆せば雨。紛々たる輕薄何ぞ欺ふるを須ひん。君見ずや管鮑貧時の交り。此の道今人棄て、土の如し。」

我神よ、如何ばかり激しき戦なるぞ、我等が中に二個の人あるを感ず。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

一人は我心を勵まし全幅の愛を以て、生涯汝に忠誠を竭さしめんを欲し。一人は常に汝の聖意に抵抗しつゝ、我に叛逆の旗を翻へさしめんを欲し。彼れ飛躍して我を戦を挑む、我は何處にか平和を見るを得べき。彼れ企圖す、然れども成就するを得ず、我は希望す、而して却つて哀情多し。

好む所の善は我之を行はず、憎むところの悪は我常に之を行ふ。

(佛國詩人ラシーヌ)

薄志は人間の屑

悪しきこといろ／＼ある中に、先づ最も悪しきは薄志の癖である。薄志は心に張なく、耐えじやうなく、賞められても勇むことなく、勵むこ



ろなく、如何ほき人に笑はれても耻かしと思はず。常住眠りて居るやうなる根性を云ふ。

薄志者は必ず懶惰者である。課業にもあれ、吩咐られたる事にもあれ、直にはせず、一時送りに延ばし置くのである。又忍耐力乏しく、少しく寒ければ縮み、少しく暑ければゆだつやうになり、何事も得せぬ故に、學問も進まず、身に藝もつかず、何のこりえもないも少しの藝はあつても、直になまける故に毀し安い器具にひきしく用ひ所がない。薄志者は人間の屑である。

薄志者は悪しき事の根にして之れより種々の悪しき枝葉を生ず。なまけ癖の心より生ずるは勿論人頼みする癖も心から生ずるのである。

獨りにて何事も出来ぬ。幼きうちこそ、物食ふに含めて貰ふ、歩むには手を

成功は最後の一步



成功は最後の一步

引いて貰へば、四五歳になりて尙此れを欲するものあらば、不具者にあらざれば、蒲志者である。骨折を厭ひて事毎に他人の助けを乞ひ、働くがいやさに他人の厄介なるなき皆人頼み根性のさせることである。

此の癖高すれば、果ては何の職業もなくてあちこちを渡り歩き、毛虫の如く嫌はるゝ無頼漢ともなるべく、物貰ひ、乞食、竊盗ともなり下るのである。

癖は幼きうちに治さざれば、次第に増長して後に如何にしようがたい昔しより末頼もしき少年の悪しき癖のために、人の屑となりし例少くはない。生きて働くやうに生れつきたる人間にありながら薄志の爲めに何もえせず、眠れる人の如くに一生を送らんこと恥づべき至りではありませぬか。

忍耐を涵養せよ、時は決して錨を持ち去らざるべし、又何事も忍耐せる者



に必ず来るべし、又好機も能く堅忍せる者に必ず来るべし。
忍耐は吾人に向つて、正當に吾人の所有たるべき物を持参すべし、時は驚くべき大業を成功せしむ而して忍耐は、其成功に達するの徑路なり。

◆此の敵強に勝ち打つべし

人の心は本来美しきものであるが、さまざまの薰習によつて、塵垢に染まるので、それには父祖の遺傳によるものもあらうが多くは境遇の然らしむる所で山國の人は自然に獨立の氣象に富むが、其の思想が偏狹に傾き易く、平原國の人は快活であるが、自主の精神に乏しく、都會に育つた人は敏捷ではあるが、輕薄に流れ、田舎に育つた人は質朴ではあるが、迂闊な所があること云ふ様な自

成功は最後の一步



成功は最後の一步

然の感化を受けることもある。また家庭の状態で繼母に育てられた子は僻み根性が失せぬものである。無規律な家に養はれた子は無規律になる云ふ様な影響もあり。又社會の状態にも感化せられて、太平の時には太平の氣風、戰國の時代には戰國の氣風が出来る云ふやうな諸種の事情が其の人の心に影響して本來の心を磨きもすれば曇らせもするのである。田舎では品行方正云はる、人が、都會の腐敗せる空氣に觸れて忽ち墮落する云ふこともあれば、これまで正直に働いて居つた人が、他人の贅澤を見て心氣一轉、終に惡趣に沈淪するものもないではない。彼の鑄掛け松が兩國橋上で下に浮べる遊船に三味太鼓の音を聞いて「人生僅か五十年、アんなに贅澤をするのも一生、又此方ミ等の様に稼ぎ暮すも一生、同じ一生なら太く短く送るがよい」云鑄掛け道具を河中に



投じて盜賊ミなつたのも、外界の影響によつて心を變じたのである。「金色夜叉」の間貫一が戀愛の不成立に性格を一變して、高利貸ミなつたのも亦これである斯くの如きは古來の小説に其例乏しからざることで、又實に吾等の日常に目撃する所である。

吾人の心は移り易く、動き易きもので、よし其本來は美しきものであるも周圍の事情境遇の爲めには、これを掩ひこれを隠して全く塵埃堆裡に埋めらるゝに至るこゝがないのでないから、宗教云ひ、教育云ふものがあつて之れを矯正して其本を失はしめざるやうにするのであるが、修養其の功を積んだ人は、自ら守るこゝ堅く、外界の爲めに動かさるゝこゝはないが、一般普通の人は、なかく此の誘惑に勝つこゝがむづかしい。それであるから吾等は單

成功は最後の一步



成功は最後の一步

に修道を勤むるのみならず。又社會の風紀を改良して、及ぶべきだけ、これ等の誘惑に滅じ、墮落の機会を退けて修道に便ならしむるやうに心掛けねばならぬ。

沙石集に、

四人の僧の無言の行をなす事が記されてある、夜も更け燈火も段々消行んじするに、下座の若僧まづ聲を出して、小使の者火をかき上げよ云ふ。次の僧が無言の道場に物云ふは何事ぞ云ふがめた、さうするに上より二人目の僧が一人ならず二人まで物云ふは何事ぞ云ふ又云ふがめた、終に斯くして三人まで物云ふ、上座の僧は得意顔に、吾れのみは物云はぬぞ云ひて、無言の行も遂に中止せり云、人の目の塵は見出し易きものにこそ。



目的の爲めに正良の手段を探れ

今日の所謂成功術は、手段を擇ばずして目的に達するを指すのである。これを事とする者の言に言ふ所を聞けば、細工は流々仕上を見よ云ふにあらざるや、苟も目的に達するを得ば復た何の躊躇すべきぞ、手段の如何を問ふは愚物の事である、權勢を得たる者、金を得たる者を賞讃して、之れを羨みて已まず。其の如何にして之れを得たるかを問ふことは無いのである。

然れども手段は決して忽にすべきにあらず、目的は手段より大にして、大なるもの、爲めに小なるを捨つるは避くべからざる所なるも、孰れも皆な一の行徑なるに外ならぬのである。究竟手段も亦た一つの目的たるに相違なく、若

成功は最後の一步



成功は最後の一步

干の手段を果ぬるは即ち若干の小目的を達する者云ふべく、既に豫定の大目的に達せるにて、其れ以上更に大なる目的があり、初め目的をせし權を得、又た金を得るも、次で之を如何に運用すべきかの問題に到着するのである。要するに手段云ひ目的云ふは、或る一時の關係にして、手段に不正不良の跡あらば、目的の善なりとも、差引して零たること無しは云へぬ。今日の成功者云稱するの輩には、一方より觀て悪人小人に過ぎざる者があるは、蓋し是の故である。

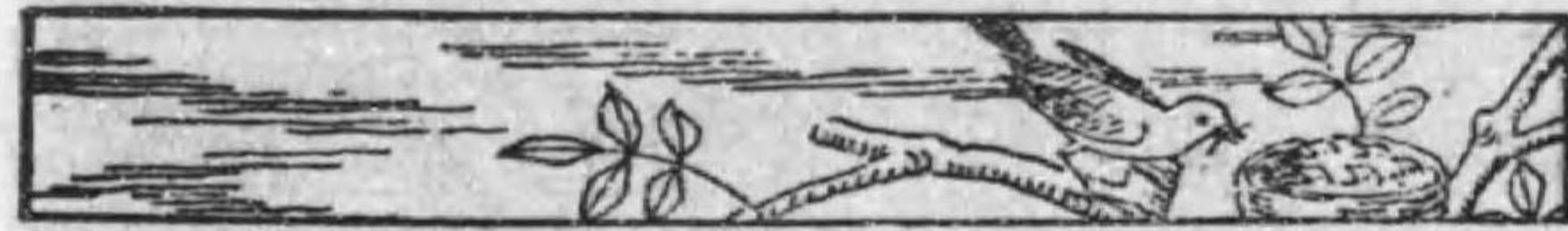
金錢を得んとする者の多くは手段を撰ばざる人が多いのである。片足を揚げて尿するこゝ犬の如くせざれば以て財を積む能はず云ふ諺ある程にて、多少の不善は免がれざるに似たれども、猶ほ飽く迄醜惡なる手段を採るこ否らざる



るこの別があるのである。

手段を撰ばざるも成功さへすれば、時人に賞められ羨まれるは常であるが、其成功の大なれば大なるほご、初めに行ひし悪事の之れを傷くるこゝ益々甚だしく、且つ後の之れを學びて志を立てる青年を毒するこゝ更に甚だしいのである。己れ一個の利を計りて全く他を顧みざるの類は、究竟度し難き人物たるべきが、而も若し一層自ら重んずるの必要を感じるのである。則ち成るべく正しき手段を採るに努めねばならぬ。豊太閤が主人の委託せる金を掠めて身を立つるの料したる云ふのは、歴史上正確ならざる事であつて、其の午後の行動の豪快なるより推すも、斯かの陋劣の行動に出でしを信じ難き事である。されども傳説の存するが爲めに、後世盜賊の此に籍口せる少からず。延ては英雄

成功は最後の一步



成功は最後の一步

は手段を撰ばず云ふの適例に爲るに至るのである。洵に慥むべきである。約言するに、不正不良の手段を敢てする者は、本来の悪人か、否らすれば正良の手段を探るの能力なき者にして、決して稱すべき者ではないのである。

成瀬隼人正成の城下に、米屋八郎兵衛云ふ慾深き人があつた。店には小なる遣り櫛ミ、大なる取り櫛ミの二種の造り置きて、多くの金を得た。此の事領主の耳に入つて、其罰として、之れを逆さに遣り櫛にて取り、取り櫛にて遣らせる様にしたが、彼も始は是非なく此の命に服したのであるが何がさて其の日より、客は山の如く入り來つて、却つて利益は倍に及んだ云ふ。



◆ 苦樂は己が心中に有る

心の樂しめば觀るこして樂しからざる無く、心の苦しめば觀るこしらざるは無いのである。心の樂しめる。幸ひにして心の苦しめるは不幸である。心外物情に著大の差はあつても、苦樂の上に何の差を及ぼさず。粗食して椹樓を纏ふ者あり、美食して衣服に寶石を飾るものもある。而も誰か二者に就て孰れが幸福なるを判断し得べき、貧にして苦しむあれば、又絶えて苦しまざるものもある。或は富みて樂むものあれば、又絶えて樂しまざるものもある。其の心に立ち入れば往々意外なるものがある。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

池あり、其の富を問へば巨萬なり云ふ。而して其の主人たる者は欲するこして得ざる無きが如しである。實に欲するこして得ざるなく、耳目の快を縦まにすべき者。一命を下して直ちに得べきも、唯だ一つの必し難きものがある。其の果して心の安きを得るや否や、是れ誠に難問題である。綺羅を重ね、珍味を陳ぬるも、或もの、心を責むる無きか、夜静かにして人定まれば勿論、晝間に於ても間斷なく心を惱まし、忘れんこして得ざるものはなきや。悲痛の狀態は、間に深窓に見るものである。深窓に聞くものである。

固より物質上の満足を得て、兼ねて心の満足を得たる者もある。是れ人生の幸福を極むるに庶かいたのである。而も他に外觀に内實に齟齬せる者の頗る多きを認めねばならぬ。其の例證は種々ある事にして計ふるに堪へぬ所であり。且



つ之を公にするを忍びざる所である。

貧は人の嫌ふ所、又た嫌はざるべからざる所である。世を擧つて貧に安んじ移るこを肯せずんば、國は永く貧國たるを免れぬのである。されど種々の事情よりして、境遇を變ずるこが出来ぬのである。正當の途を踏みて貧なる者は此の限りにあらざるも、其の或る事業を以て世に貢献するの稱揚を値すべきは固よりの事にして世に貢献する所はないまでも、悪事を働かず、顧みて疚ましからずんば、常に心の平和を失ふこはないのである。九尺二間に住みながら、愉快なる氣象の眉目の間に浮ぶあるは、之れが爲めである。

天國は汝自らに在り。心の樂しければ何物か樂しからざらんである。但し其の器の小なる物は早く満足し、器の大なるは遂に満足せず。向上の慾なきは稱

成功は最後の一步



成功は最後の一步

すべきものにあらず。人人力の及ぶ限り發展に勉めねばならぬけれども、如何なる場合でも心中に暗黒の無いことを常に心掛けねばならぬ。然れども人、一日も憂ひのないこと云ふ事は出来ぬのである。一身に憂ふべきことなくも、親戚友人に憂ふべきこと、或は國家に憂ふべきことがある。世界にもあるのである。范仲淹の天下の憂に先立ちて憂ふこと云つた言葉も、決して故なしはせぬけれども、心に疚しきことなければ、憂ふこと雖も度を失ふことはないのである。心の樂しまずんば、花を觀るも樂しからず、心の樂まば花を觀ざるも樂しみである。花を觀て樂み、觀ずして亦た樂しむ、ラスキンは如何なる天候も樂しからぬは無しと言へり。即ち要は心に在るのである。

物を見るに色眼鏡を用ひるは、見る間だけは面白けれども判斷を下す時は



過を大にするのみ憎惡愛着の念を去り無私、不偏、公平の冷靜に觀察するに非ざれば物の實質を窺ふ事は出来ぬ。一休曰はく
見る毎に皆そのまゝの姿かな柳はみどり花はくれなる。

長さと幅と厚さとを合せ得よ

一歳を加ふるは一歳を失ふものにして、春秋の漸く減するるのである。門松を以て一里塚とするは故なし云ふべからずである。而も生れて直ちに死するあり、或は五歳十歳にて死するもある、必ず百歳に定まれば、一歳を加ふるの即ち一歳を減する者であるけれども死生命の在るありて、何時死するの測られざらんか、一歳を加ふるは其れだけ壽命を得るに外ならないのである。一歳を加

成功は最後の一步



成功は最後の一步

へ、二歳を加へ三歳を加へ、年を加ふるの多きほど、生命を承くるに於て成功するものとするのである。死せば萬事休す。命ありての物種子も云ふ。年数は成るべく加ふるに若かずである。

されども徒らに長きは恰も線の如きものである。必ず幅なければならぬ、世に百歳、時としては百五十歳なるありながら、生存せるや否やの間はれざるは長ありて幅なきが爲めである。項羽や、賈誼や、歴山や、ラファエルや、モツアルトや、三十前後にて死し、事功の廣く知れ渡れるは、實に生命の幅に於て秀でたのである。長三十にして幅百なるは長百にして幅三十なると同じかるべく、之れに比し、長も足らず幅も足らざるは、頗る短命なるを免れないのである。長の期すべからずんば成るべく幅を廣くするに務むべしである。



されども長あり幅あるは平面たるに過ぎないのである。又厚さなきを得ず。長百にして幅百なるは、眞に生命の豊なるらしきも、厚十なれば、長四十、幅四十、厚百なるより短命である。長幅の少く厚の多きは、往々世間に見る所であるが、中江藤樹の如き、壽命僅かに四十一、近江の一村に隠れて外に出でず而して冥々袖に感化の深く及べるの疑はれざるは、徳を以て優りたればなり云ふことが出来る。凡そ事は或は聞え、或は聞えず、名聲は必ずしも言ふを値せず。唯だ長き幅も厚きを合はせ、比較的積の最も多きを以て最も長命である云ふのである。即ち其の多きは幅の存する所である。

カーライルが老年に及び、貴族の榮位を授けられんことを、固く辭して受けず、意氣頗ぶる昂れる頃、一日公園に散歩せんことを、乗合馬車に乗つた

成功は最後の一步



成功は最後の一步

同乗の客は其何人なるかを知らず、蓬頭疎髻、素服を纏ふて、眼光のみ爛々として人を射る、其の容貌の極めて奇異なるを凝視して、中には「アノ老人の醜さよ」なご、云ふ者さへあつた。馬丁はカーライルなる事を知つて居るものから嘲笑する乗客の袖を引きながら、小聲に「汝は彼の破帽の下に、如何に偉大なるものが伏在して居るかを知らぬのである」ミ馬丁は更に聲を潜めて「彼は誰あらふ、カ……」

◆又遊樂の道を求めよ

茫然として唯だ眠食に耽るは、寔に人たるの本分を盡くさざるかの如くに考へらる。我が國情に看るも、幕府時代に較ぶれば、近年は總じて業務に勉強する形がある。



曩に旗本八萬騎を稱せしは遊食の徒にして、其外にも悠遊眠食せる者甚だ衆かつたのである。今も猶ほ遊食の徒あるにせよ、其の數や大に減じ、隱居の身分さへ少しく怪まるゝに至つたのである。

明治に入りても、初め政府に仕官せる者は、概ね用少く閑外く、一定の時間に出省し、一定の事務室に参集し、簿冊を點檢し、製理し、茶を飲み、煙草を喫し、而して一定の時間に退廳するのであつた。是れ所謂日々の勤務である。大學を出で、官に仕ふる者は、嘗て斯かる習慣に通ぜざりしが故に、出省して用務を命ぜらるゝことあれば、直ちに之れを果して然る後ち何の爲す所も無く呆然として天井を眺めて時を過すのであつた。同僚の其の人に對して教示するありて曰く、事務は爾かく迅速に了すべからず。出仕の時間中に了了し能

成功は最後の一步



成功は最後の一步

ふ如くにして辨ぜよ、ミ。當時事務に慣る、ミ慣れざるこの相違は即ち此に在つたのである。事務なくして而も事務あるかの如くに装ふ者。最も事務に慣る、ミ云つたの、ある。十八年の暮、官制改革ありてより、大に各省の事務を督勵し、且つ勉めて繁文縟禮を除き、更に執務時間を増したのである。是等の事久しからずして一旦發せられんしたが、漸くにして次第に勤勉に復し、今は猶ほ充分ならずは云へ、前年に比較すれば、大に勤勉の風を加へたのである而して獨り官省のみならず。一般の會社製造場皆然りである。察するに今日以後益々然ることならんと思ふのである。

然れども、大に勤勉なる風を習ふと同時に、又た成るべく餘裕を作るに努力せねばならぬ。世上の事は如何に進歩を極むることありとも、唯だ其の機械的



なるは、餘りに殺風景に過ぐるのである林立せる煙突の暗黒なる煤煙の間に映するのみにて、他に一物の眼を悦ばす無からんには、人の生存する所以の那邊に有るを知り難きに至らん、又た必ず美的の眺望無かるべからずである。樹木の生ぜる秃山、船楫の通ぜざる細流は少しの益無くして、徒らに交通の妨礙たるに過ぎざれば、煙突の煤煙の外の一物の目に映する無きよりは、秃山細流の點綴するあるを優れりすべく、若くは煙を隔て、青山碧水の眼に入るを以て更に大に心に快しすべしである。人の生を享くる、亦た此に似たる所がある。遑々忙々として終日此の間無く殆んご身の落着く所を知らざるは不可である。斯くの如きは守銭奴の黄白を蓄積し、鏘然鏘然たるに接して愉快を覺ゆるに擇ぶこと無いのである。須らく勤勉なると共に、爾かく職事に忙殺されざるだけ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

の餘裕を作るべきを要するのである。世事益々隆昌に趣きて、市街の建築彌々
蜜を如へ、汽車汽船の往來一層の頻繁を致すに随つて、更に益々公園設置の必
要を生じ、且つ名所保存の肝要を感じるに非ずや、一般に奮闘努力の風を養ひ
て、勤勉其の者を愉快に感ずるの念を長ぜしむるは、洵に努むべきの緊切事
である。それと又同時に、善く遊樂するの道を求むべしである。一に勤勉を旨
として多忙に苦しむるが如きは特に稱するを得ざる處である。若し多忙を口
にして自ら勤勉なるを誇るに至りては、固より云ふに足らぬのである。

明治天皇御製

花になり實になる見れば草木も木も、なべてつみめはある世なりけり。



昭憲皇太后御歌

山水も木の根岩が根くぐらすば、大海原にいかで出づべき。
精出してそよけ若竹今の内、
學びする机の上の蚊やりかな

一 燕 村 茶

◆思ひ立つ日か吉日

ナポレオンは最も善く時間の大切なことを知つて居る人であつたその比類の
ない大功を奏したのも、多くは時間の使用が上手であつたからであるかつてオ
ーストリア軍が敗北したのを笑つて「彼れは五分時間の價幾何なるやを知らぬ
ために敗れたのだ」と言つた。この時間を重んじた英雄ナポレオンも、ワーラ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

ルローの大戦においては、自ら時を誤まつたのこ、部将ケルシーの遅参したこによつて、一敗地に塗れてしまつた。

『思ひたつ日が吉日』といふのは、成功の秘訣を教へた明言である思ひ立つたら直ぐ其の事に取るか、れば興味湧くが如く、わが身の勤勞に服して居るのを忘れて、たゞ快樂を覺ゆるばかりである。従つて事業の進歩も速かである。もし思ひ立つた日に始めなければ當時の興味は索然として消え失せ、他日これを始めるのに非常の困難と痛苦を感じざるばかりでなく、成功の一段に至つても即座に着手したのに劣る所がある。故に或る大商店では規則を設けて『郵便は即日返答すべし。』定めたといふ。事を成すは種子を蒔く様なものである。一度季節を失へば、終にこれを蒔くこが出来ぬ。ヘクリトスは曰く『汝は河



水を以て流れて息まぬ、時往いて還らぬ』大事も興味も熱心も元氣も、一度さつては、復び得るここの出来ぬを謂ふのである。

ウオーター、ローリーは僅少の時間で多くの事をした人である。其の術を問へば即ち『何事でも成さねばならぬ事は、直ちに之れをする事である』と答へた。あゝ、なんたる名言であらう。世の失敗者は多くは明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐に吹きはらわれて、茫然自失せるものでないのはない鐵はそのまだ紅いうちに打つべく、枯葉は太陽の輝いて居る間に乾かすべく、事は時機を失はずして始むべきである。昔から大人と呼ばれ、豪傑と稱せられた人は、大抵みな分陰を惜みて、機會を捉へた人である。時を誤るものは、責任を誤るものである。決して世間の信用を受ける事はな

成功は最後の一步



成功は最後の一步

い、ワシントンの書記、ある日遅刻して出勤した。言譯して自分の時計が遅くて居た云つた。ワシントンは告げて云ふ「汝は正確な時計を買ひなさい。さもなければ他の書記を備ふ」ミフランクリンは常に遅刻勝の奴僕を笑つて「よく辯解する人は何も役に立たぬ人である」と言つた。ネルソンある時軍艦に乗らうとした。其の前夜御者が来て「明朝正六時に馬車を廻しませう」といふや彼は「それより十五分前に来い。一定の時より十五分前にあるのは余の主義である」と言つた。

ナポレオン一夕諸將を晚餐に招いた、その時刻になつても、諸將がなほ来なかつたので、彼れ一人で食事を始めた、將に食卓を離れやうとする頃、諸將やつて来た「さあこれから各自の職務をなせ」と。凡そ時間も大切に守るものは、勤勉の習慣を生じ責任をつくし、義務を重んずるわけであつて、立身出世の基である。



◆私利利慾は人類を墮落せしむ

水の低きに就くは其の天性である。人は生れながらにして共同生活を営むべき資質を有つて居る。犠牲の精神は即ち人生共同體の一員として人の自然に有する所の資質にして、此の精神なければ人類は皆孤立孑居して恰も禽獸の群の如く、到底進歩したる社會を形造くることは出来ないのである。一步を進めて之れを論ずれば、人類社會は物理的に群集するものにあらずして、化學的に團結するものである。是れ人類社會が他の動物の社會と異り、團體として最も進歩的の意義を有する所以にして、萬物の靈長たる活動は正に發現するものこそ謂

成功は最後の一步



成功は最後の一步

ふべきである。而して犠牲の精神は即ち人類相互の關係を化學的に結合せしむる所以にして、他の動物は斯かる高尚なる精神を有せざるが故に、意味ある社會を形造ることは出来ない、故に人は常に此の精神を以て行動を爲すべきものにして、他の動物と異なる所の崇高偉大なる人格は初めて茲に現はれ、人生をして頗る意味あるものたらしむるここが出来るのである。今や實利主義は社會の上下を風靡し、高尚なる犠牲の精神の如きは之れを説くを迂なりとするの風潮あり。豈憚して慨せざるべけんやである。嗚呼私利私慾は人類をして禽獸の域に墮落せしめる者である。徒らに權勢利慾を追逐する者は、猿猴の冠し又食を争ふに擇ぶ所なき者である。此くの如くにして豈國家人民の興隆發展を期するここを得んや。苟も心を世道人心に置く者、方今の時勢に寒心せざるべから



ざるなり。

佐久間象山は常に鏡を懷中より離さなかつた、人ありて、偶々、浮言實なき言を語るに遇へば、かの鏡を取り出して示して曰く、
「マーお前の面を觀よ」

◆浩然の氣を養へ

孟子一書、異議多く、論語と同列にすべからずこの説あれど、
我善養浩然元氣

こあるは、後人に影響せる所深く且つ廣いのである。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

鼻睡一東高、呼吸通天地、
堅凜天地氣、聚在讀書人、
天地正大氣、粹然鐘神州、
正氣寒天地、聖人唯踐形

一 方 東 松
齋 谷 湖 陰

其の他氣に關する概ね此の如きものである。氣云ひ氣を養ふ云ふは、空想に出でしに似て居るけれども、此類の語の定語を爲れるものは一にして足らぬのである。スタミナ、エネルギーの如きも亦然りである。浩然の氣に相當する近世語なきを怪むなけれ、多年何等か理解せられたる所其の事實なきにあらずして、其の解釋の宜ろしきを得ざるのみである。畢竟、彼の氣や、心及び體よりして解釋すべきものである。

以直養而無害



云ひ、

配義與道無是餘

云ふは心より觀たるものである。

正氣なれば苦悶せず、苦悶せざれば爽快、爽快なれば、強壯にして健康、間々例外あるも、多數は皆然りである。醫ツ、ボツシ百三歳にして云ふ。

『百歳に達するの秘訣は純潔なる生活に存す』

云、盡く信すべきに非ざるも盡く棄つべきものでもないのである。

◆健康の増進

◆人事の至幸と活動の根源

成功は最後の一步



成功は最後の一步

西洋の格言に曰く「幸福は先づ健康に存す」也。寔に健康は人生最大の幸福である。如何に智勇辯力あるも、如何に權威の犯し難きものあるも、又如何に資財あるも、唯此の健康にして不十分ならんか、其の人の幸福は大半喪失したるものと謂ふべきである。

殊に況んや身體は活動の根源である。健全なる身體なくして如何に奮闘せんとするも、其は翼なくして飛ばんとするやうなものである。今や社會の進歩に伴ひ、人間の活動範圍も亦益々廣く、従つて益々健康なる體力を必要とするものである。而して學窓を出で既に社會の人となるに至つては、世事務務身邊に集し來りて身體を訓練するの餘暇を得ること困難である。故に人は青年時代に於て大に身體を訓練して、他日の活動に準備する所なくてはならぬ。若し羸弱



なる身體を以て社會の陣頭に立たば、人事の煩累は益々其の健康を害し事業未だ半ばならずして身は北邸一片の煙に化し大志空しく他に委するの例甚妙からず。社會に立て大ひに活動せんを欲する者は、先づ青年學生時代に於て身體の訓練を怠つてはならぬのである。

ガイドル卿(九十五歳)喫煙せず、絶えず戶外運動をなし節制を旨とす。

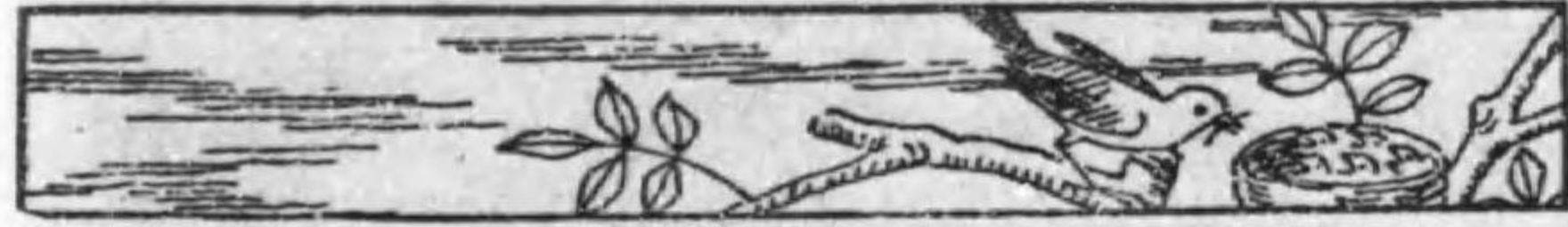
グリムソルブ卿(八十八歳)喫煙せず、萬事節を守る。

ネルソン伯(八十二歳)喫煙せず、早起、節制、つこめて服藥せず。

サー、ハツギンス(八十一歳)喫煙せず、少量の肉と牛乳を常食とす。

サー、ドリンクウォーター(九十二歳)喫煙せず、戶外運動をなし、睡眠時間は七時間以上なし。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

◆活動の第一要件を備へよ

タフト氏嘗つて我青年に告白する書に論じて曰く「諸子にして活動の人たらんを欲すれば、須らく先づ身體を強健にし、第二に精神を堅實にし、第三に目的を高遠にすべし」云々健全なる身體は活動の第一要件である。試みに今外國の青年が如何に其の身體を鍊磨しつゝあるかを見るに、米國に於ては野球を以て國技となし都鄙を通じて青年學生の最も熱狂する所のものは即ち野球の遊戯である。彼等の斯様な野外の遊戯を嗜むは殆ん其の天性に出で、壯年に入り老境に進むも猶其樂を改めない。現にタフト氏の如きも、身國務大臣たり、大統領たるの時に於て尙閑を偷んで青年の間に伍してボールを手にしつゝあり。



一般に米國人が體格偉大にして精神も頗る活潑々地なるものあるは此の如き野外遊戯に重きを置いて其の體力を訓練しつゝあるに基因するやうである。英國の青年は端艇競漕に熱狂するに、猶米國人の野球に於けると同じ事である。年々歳々、テムス河上に於ける牛津、劍橋兩大學の競漕は、獨り英國のみならず世界の視聽を集中するの觀ありて此遊戯が如何に英國青年の身體を鍛鍊し士氣を鼓舞しつゝあるかは茲に論ずる必要もない。其の他一般に歐米は戸外的にして、獨り男子のみならず、女子も亦體育に熱心なるに、到底吾人の企て及ぶ所でない。殊に我國に於て壯年以後の男子が嬉々として遊戯に耽りつゝあるが如き光景は遂に之れを見ることを得ず。随つて我國民が歐米人に比して早老の傾きあるは注意を要する所なり。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

ロングフェローは老年に及びて、頭髮は雲の如くなるも顔色は艶々として老人の風がない、如何にして斯く何時までも若くて居られるか、この間に答へて曰く『あの老樹を見られよ、まだ花が悪くなつた事を覚えぬのは、あれでも毎年少しづつ、生長して居る故である、我も老年に及んでも、尙幾何づつでも生長することを心懸て居る』と。

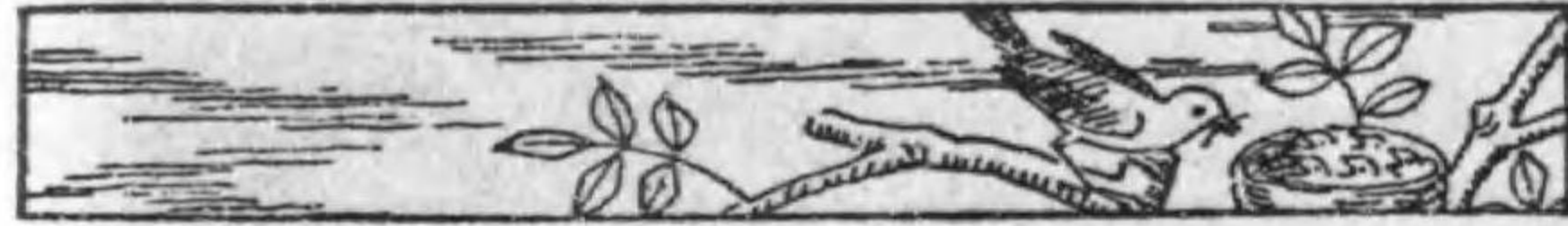
●身体練磨の方法

昔時封建の時代に於て、士流青年の教育は學問よりも寧ろ武藝に重きを置きたるを以て、劍術、槍術、及弓術の如き、青年の體軀を鍛鍊する手段も甚だ盛なりしが今は即ち學問を重んずるの社會にして、戦争の方法の如きも亦古昔



大に趣を異にするものあるを以て一人の敵を攻撃し、防禦する武藝は自然に衰廢し、青年體育の方法として存する者は、僅に柔術の一あるのみ。柔術は加納治五郎氏に依つて今日の隆盛を致したるものにして、青年學生の身體を練磨し士氣を鼓舞するに最も適當なるものである。相撲は我國の國技とも稱すべきものあるけれども、一部専門者の興行的技藝となり。一般に普及せらるゝに至らない。其他は即ち野球、庭球、競漕等、海外より輸入せられたる遊戯である。而して近來我青年間の野球戲が大に進歩して、布哇米國等海外に遠征を企つるに至つたのは甚だ喜ぶべき事である。以上の外單獨的に身體を練磨する方法としては、體操、鐵亞鈴の如きも可し、旅行、遊獵の如きも華族的の管澤に陥らざる限りは最もよろしい、殊に旅行は常に身體を鍛練するのみならず。智見を

成功は最後の一步



成功は最後の一步

廣むるの利益ありて、吾人の最も推奨する所である。要するに身體練磨の方法の如きは、諸子の心懸次第にて如何様にも之を發見するこゝを得べく、敢て吾人の喋々を談たないこゝを信するるのである。

◆天に享くるは寧ろ薄くあれ

人の身體及び精神は訓練に依りて必ず偉大なる効果を收めるこゝが出来るのである。予は生來病弱者である云ふて其の訓練を怠るやうな事は、薄志弱行の事であつて、苟も社會の活舞臺に活動せんとするもの、口にすべき事でない。吾人は茲に前の米國大統領ルーズベルト氏に於て争ふべからざる好教訓を得た、氏は素に紐育名門の出にして、幼より身體羸弱、數次病魔に犯され、



醫師は氏が學業を廢せん事を勸告した程であつた。然るに氏は身體の羸弱なる代りに頗る鞏固なる意思を有したるを以て、以爲らく「我體力の羸弱なるは生理上一時の障害のみ！、故に鍛鍊其の宜しきを得ば、他日強健無比の體力を有するに至らんこゝを疑ふべからず」を以て依つて氏は其の病弱の身體を提けて忽ち熱心なる運動家となり、野球、庭球、乗馬等凡ゆる遊戯に於いて練達せざるなく、學窓に在る間常に「チャンピオン」を以て儕輩の間に鳴り、更に屢々山野を跋渉して獸獵に耽り、其の體力を練訓するの道に於て盡さざる所なかりき是に於て曩に日夕醫藥に親しみて形容枯槁顔色焦悴たりし病少年は一變して緒顏豐頬、常に寫眞に視るが如き筋骨隆々たる健兒に化し隨つて生來の意氣益々剛健なるを得たり云ふ、尙氏が其の自信を斷行して飽くまでも鍛鍊の功を積

成功は最後の一步



成功は最後の一步

まんごするの意氣は、氏が甚しき近視眼なるにも拘らず、練磨の結果射撃に於て百發百中の妙あり云ふに於て之を窺知するこゝを得るのである。西賢の言に「人は二個の造物主を有す、其の一は天なり人に生を享けしめたるもの、其の二は自己なり自ら其の性格を陶冶す」云ふ事あり。ル氏の如きは天に享くる所寧ろ薄うして、自ら鍛錬陶冶の功を積みたるもの云ふべく、吾人は氏に於いて眞に勇者の面影を窺ふこゝを得べきである。

◆鞏固なる精神の宿所たれ

身體の鍛錬は常に活動の資本として身體其の物の強健を致すのみならず。同時に亦心膽を練り精神を鞏固にするこゝを得べし。身體麻痺なれば精神も亦隨



つて萎靡し、假令事を爲さんごするの意あるも之れを果すの氣力に乏しきを免がれず。故に古より鞏固なる精神は健全なる身體に宿る云へり。而して身體の訓練は其の發育の時期に於てするを最も有効なりとす。一旦青年血氣の時代を経過すれば、生理上社會上之が訓練を圖るこゝ容易ならず。青年諸士たる者茲に留意して常に身體の訓練に努め、以て他日繁劇なる社會の實務に執筆するの覺悟なければならぬのである。

養生七不可

松田立白

昨日の非は、悔恨す可からず、明日是れ慮念すべし、飲食ふこは、度を過ごす可からず、正物に非らずんば、苟も食はず、無事の時薬を服すべからず、壯實なるを頼みて、房を過ごす可からず、動作を勤めて、安を好

成功は最後の一步



成功は最後の一步
む可からず。

◆立國の本義

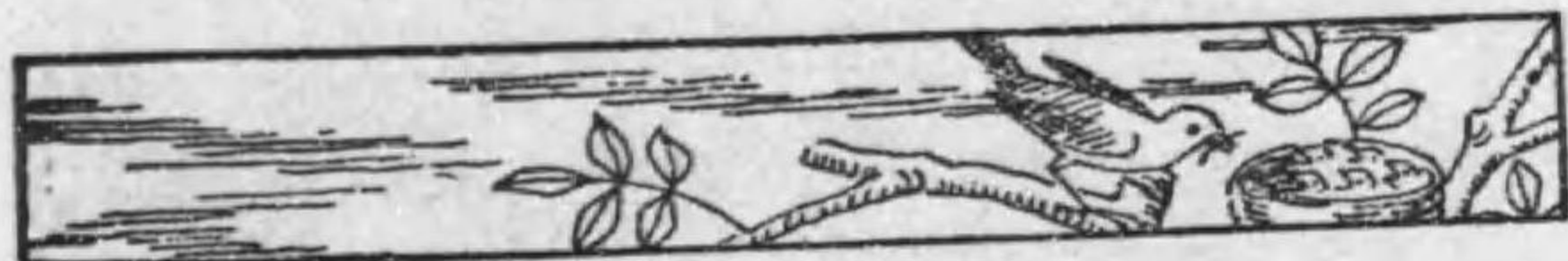
日清戦役に依つて日本は東洋の覇者となり、日露戦役に依つて日本は世界強國の班に列し、日獨戦役に依つて更に其の重く且つ大なるを示したのである。此等戦役に依つて日本人の熱烈なる愛國心と絶倫の勇氣とは遺憾なく中外に發揮せらる、我國情に通ぜざる歐米人の如きは、驚嘆の餘り之れを天下の一大奇蹟となす者あるに至つたのである。成程彼等歐米人が視て以て奇蹟となし不可解となすは寧ろ當然の理由ある様にも思はれる。何となれば今日我が國の宗教は佛教と云ひ儒教と云ひ若しくは耶蘇教と云ひ皆微々として振はず殆んど人心



を縛ぐに足るべき宗教なしと云ふも不可なき有様にして立國の大本何處にあるやを疑はしむるものある。而も此くの如き高尚なる犠牲的信念を有するは一應理解し難き所なるが故である。然れども吾人を以てすれば是れ何等の不可思議にあらず。我國には耶蘇教のバイブル、マホメット教のコーランの如き教義的の經典は之れを有せざれども、太古神代以來牢乎として抜くべからざる國民的の大教典、大精神がある。其の源を天祖天照太神の瓊々杵尊に下し給ひし神勅に發し、此國は即ち神の國として一天萬乗の列聖相承け天皇を君父として皇室を宗家として天壤を俱に窮りなきを立國の大本とするものである。

『我が國は神國なり』この思想は國民の腦裏に一種の靈妙なる印象を與へ、茲に敬神の心を生じ、茲に忠君愛國の念を發するのである。古人が伊勢神宮に拜

成功は最後の一步



成功は最後の一步

して、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼる、

ミ歌ひしは、實に國民の眞情を吐露したるものである。故に古來我國に於ては發祀を重んじ、上朝廷より下萬民に至るまで、神祇祖宗を祭り、殊に敬神の觀念に深きものがある。是れ一つの大きな宗教にあらずして何であらうか。

抑此精神は我國の四面環海の島國たる地理的關係より自然に鑄造陶冶せられたるものにして、既に三千年の久しきに亘りて我大和民族の間に磅礴し、儒教も之が爲めに同化せられ、佛教も此中に吸收せられ、蕪然たる大和魂となり、發しては萬葉櫻の如き武士道となり、宗教以上の宗教として此國土に



與に萬世無窮に傳へらるべく、國民的に成立したるものである。故に我國の神道には、初めより立教の聖人なるものなく、將た亦開宗の祖師なるものないのである。夫れ祖師なく聖人なきが故に一定の教範なく亦經典がないのである。然れども吾人は我が國に成文の經典なきを憂へず、唯此立國の大精神を辯ぜざる者なきやを憂ふるものである。天に二日なく地に二王なきは實に我國體の眞髓である。然るに堂々たる史學の専門家にして此理に通ぜるものあるが如きは明治聖代の汚辱を謂はねばならぬのである。畢竟するに彼等は禮讓放任常ならざる他國の歴史に心酔して、世界無比の貴重なる我古代史の研究を忽にするものにして當に昭々たる神明の靈に對して愧死すべきである。若し夫れ彼等に於て殊更に新奇の説を爲し以て頑連の徒に阿附したるものこそすれば、最早學者

成功は最後の一步



成功は最後の一步

こしての立脚地を失ひたるのみならず。故意の大義名分を棄るの罪終に遁るべからざるものである。是に於てか吾人は今日の青年諸子の間にも大に我古代史の智識を普及し依て神明を敬ひ皇室を尊崇するの風を盛にせん欲する者である。

斯る思潮を排撃せよ

生存競争場裏の失敗者に同情を表して、其地位を高め其幸福を増進せんとするは、社會政策として文明諸國の爲政者の齊しく努力する處である。人は生れながらにして體力に強弱あるが如く、智力にも亦甲乙あるのである。故に優勝劣敗は社會の通則にして劣者の淘汰は自然界に人類界に通じて行はる、處の



天則である。之あるが爲めに社會は進歩し、之れあるが爲めに社會は活動するのである。此の天則は人爲的に打破することを得ざるものにして、若し此原則を打破するものミすれば社會は忽ち沈衰廢壞して一日も保つことを得ざるものである。然るに世には横着なる痴人ありて、此自由競争の制度及び財産私有の制度を根本より破壞して資本家の組織を廢し唯勞力のみによりて所得を定むべし唱ふる者がある。是れ即ち普通に所謂社會主義である。然れども資本なくして勞力は如何に活用せられ如何に其の効力を表はすべきかを、考慮すれば、此かる主張の誤謬たることは智者を俟たずして明かである。此かる誤謬の思想に尙一步を進めてあらゆる權勢を否認せんとする彼の無政府主義の如きは、人生共同生活の本義を没却して己れ自身の存立をも否認するものにして、狂愚も

成功は最後の一步



成功は最後の一步

甚だしきもの謂はねばならぬのである。

要するに、斯かる不健全なる思想は、世の所謂成功者に對する陋劣なる猜忌心、所謂「棚から牡丹餅」主義の横着心に醸成せられたるものにして、男子として最も恥づべく厭ふべき思潮である。此かる思潮は極力之れを排撃し根絶すべき論を俟たぬことである。爰に於て吾人は偏に國法を重んじ皇室を尊崇し、國家の保護の下に智力を盡して活動すべきものであることを囑々するるのである。

◆數十年も數月の如し

「新なるは常に好まる、舊なるの却つて良きの屢々あれき」



こは北歐の諺にして、何處にも事實として現はるのである。守舊の名ある

支那人さへ、人心隨歲改、世事逐時新

云ふ。實に新浴者根其衣、新沐者彈其冠、人之情也」

こ荀子にあるが如く、新たなるを好むは人の情である。

人の情にして、又人に缺くことの出来ぬものである。新陳代謝は生命の繋がる所、其の停滞するは即ち衰頹を意味す、青年の意氣旺盛、新に就き奇を求むるは、自ら進み、併せて他を進むるもの、其の猪突して顧みざるは寧ろ賞讃するに足るのである。

而も好む所必しも良からず。好悪は判斷なりとするも自ら種類あり。普通

成功は最後の一步



成功は最後の一步

に好む所は一時の感想よりし、遠からず好まざる所なる者少からず。間斷なく新分子に注入を要するも、新分子は一樣ならず。新なる一標準を以て其の良否を決するを得ず。新舊の良きを探るをば老練云ふのである。

且つ壯時希望の益ち、事として成し得ざる無しを考ふるも、後何事をか成すは幾人あらうか、春秋に富むは一種の資産にして、以て事を成し得べきに似たれど、事は時のみにて成らず。力を發揮せず。能を發揮せずんば、時は空しく過ぐ、數十年も數月の如きものである。

少壯の怠るは老年の勉むるに劣る。雨森芳洲八十一にして古今集を誦する一千遍、自ら賦する一萬首、カート八十にして希臘を學びアルタルク同年にして羅甸を學んだ、チヨースターの傑作は五十四に始まりて六十一に終り、モルトケ



埃國を攻めしは六十七、佛國を攻めしは七十一、チ、アン及クーパーは百歳まで畫筆を離さなかつた。

少壯は最も有望であるが、徒らに齡を恃むべきでなく、老年は前路幾くもなけれど、尙ほ爲すこと有るに堪ゆるのである。

◆ 國運發展の要素と時計の機械

國運の發展云ふことは、戊申詔書の大主旨で、何人も是を望まぬものはないのであるが、其國運の發展云ふ事は如何なる事であるか云ふ事を考へるに、是れには有形上の發展と、無形上の發展との二つがある。有形上の發展云ふのは一つは人口のふえる事で、百萬より千萬。千萬より一億人のふえ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

て行くのは國運の發展に相違ない。其の次は領土の擴張で自國の領分が段々廣くなる云ふ事は、是れも亦國運の發展に相違ない。此二つを通常發展云つて居るのであるが、併し是れだけではまだ眞の發展云ふ事は出来ない則ち其他に於て尙ほ無上形に於ける文明の發展云ふ者がなければならぬ。いかに人口が殖え領土が増しても、其の國民が無智文盲であつたならば、それは正當の意味に於ける國運の發展ではないのである。國民の發展は智力も増進して商業も繁盛に赴き、世界各國に對し恥かしからぬものならねばならぬ。

然らば今や我が日本の國は是れを古來に比して國運が發展した云はる、か何うか、先づ人口の上から見るに昔から日本國民即ち大和民族の事を天の益人云ふて、人口の増殖には非常の速力を以て居る。ごく古い事は不詳ぬが、今



より一千三百年前、推古天皇の十八年則ち聖德太子の時代の我が國の人口は四百九十八萬八千人あつたらしい、其の後菅原道實公の時代には殆んど倍加して八百萬人となり、其の後徳川六代吉宗の時には二千五百萬人になつた。それが段々増加して、明治の御代になつて、三千萬、四千萬云つて居たが、今日では六千萬の大數に至つたのである。領土の方から云ふに桓武天皇の時代には、今の本州全土が日本國云ふことも出来なかつたらしい、彼の有名な多賀城碑文には蝦夷國境を去るに二百二十里有る。其の時分の一里は六丁であるから百二十里云つても大約二十里しかないのである。假りに多賀城の碑を今の陸前の宮城郡に在つたとするに、陸中の陸奥は蝦夷の領分であつたらしい。坂上田村麿の東征の結果、漸くそれが日本の領分になつたのである。其の後戦時

成功は最後の一步



成功は最後の一步

代になつて、西南の方は琉球が島津家に交通し、東北は今の北海道を經營せられて、大分領土が増した。維新以後にはまづ琉球が我が物となり。日清戦争の結果臺灣之れに加はり、日露戦争の結果樺太の南部又我が有となり、それに韓國を併合し、滿洲に於ても利權を得る様になつたから、領土も亦擴張せられた云ふことが出来る。則ち人口も領土の両面から云ふて國運の發展云つてもよいものである。

更に文明の發展は如何であるか、凡そ一國文明の發展云ふものは、太古の時代に於ては、一國は一國づつ、漸時に發展して行くのであるが、世の開けるに隨ひ、他國との交際が始まり、其の文明をも受くる事となりて、それを受けて國民固有の文明に培ひ、遂に爛漫たる花を開く様にせねばならぬ。日本には



日本固有の文明があつた。併しそれだけでは到底完全のものでない、然れば培ふのに支那印度の文明を以てし、其の長を採り短を捨て、悉く是れを自家のものとし。茲に萬國無比の國體を構成した。世界いづれの國でも他國の文明に接觸する時にいたづらに之れを模倣して、少しも自家の撰擇を加へないものは、遂に其の國を亡ぼして仕舞ふ。又他國の文明を取つて自己の國に同化するものはないものは、是れ亦世界の進運に伴ふ事はできなくなる、我日本には外國の文明を取つて自己の國のものとなる同化力もあり。又其長所を採つて短所をすてるの撰擇力もあつた。此同化力も撰擇力もが、日本の國運を發展せしむるの素因になつたのである。

成功は最後の一步

維新以後日本が西洋の文明に接觸するに當つては、唯彼に同化して國民固有



成功は最後の一步

の元氣を失ふでもなく、又頑迷固陋に外國の新來の文明を排斥するでもない。則ち長を取り短を棄つる撰擇力によりて、全く日本の物さなさんば止まないのである。我が國運は斯くの如くにして發展して來たのである。

『時計の表面は、僅かに大小二本の針のみであるが、其の裏面には多くの機械が有る。若し其の機械の一小部分でも破損した場合には直ちに全體に關係して表面の時間が狂つて仕舞ふ。國家の發展云ふ事は、丁度表面の針に誤りなく運行せしむるに同じく是非地方の小機關の運行發展を圖らねばならぬ。只權力を中心集注して、地方々々の發展を誤まるのは、恰も時計の表面のみに氣を附けて、裏面の機械を忘れて居る様なものである。地方々々は互に負けぬと思つて其發展を競ふ内に、國家全體の發展なるのである。甲の村は乙の村に負



けまい、乙の村は丙の村に負けまいと、互に奮勵して遂に一郡の發展となり、甲の郡は乙の郡に負けまい、乙の郡は丙の郡に負けまいと思つて一縣の發展となるのである。又甲の縣は乙の縣乙の縣は丙の縣其の發展を競ふて遂に一國の發展なるものであるから、地方の發展を忘れて國運の發展を圖る云ふは大なる誤りである。更に言葉を変へて云へば、一國には都會もあれば田舎もある。其の都會も田舎も諸共に國運の發展云ふ大目的の本に奮發力行してこそ眞の文明は産み出される、都會許り發展して田舎の發展せざる國は又眞の文明の發展云ふこと出来ぬのである。都會ばかり發展して田舎の發展せざる國は、國民の元氣が沮喪する。田舎のみ發展して都會の發展せざる國は又文明の發展云ふ事は望み得ない。兎に角地方々々が皆此大目的の爲めに動くのであ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

る。それには地方自治云ふことが最も必要である。國家の要素たる町なり村たるの自治が完成せられずして、何うして一國の發達を期するこゝが出来やう然るに地方自治の根底は、國家の要素が市町村にあるとすれば市町村の要素は即ち各個人である。されば個人をして自治的精神を養はしむる云ふことは地方自治の根底となり。國運發展の基礎となるのである。此に於て吾人の要求するは、自治の精神もあり、共同の精神もある人にして恰も時計の機械が自分々々其の分を守りて職を盡して働きつゝ、加之も共同一致して時計の表面をして誤りなからしむる如く、先づ自分の心を治さめ、人々接して協力一致して行く是れが人格の修練である。又國運發展の根底である。我が國民各自に此の偉大なる精神を失はずして、相與に務めて怠らざるに於ては、國運の發展は期して



待つべきのみである。

◆國民としての本分

今日の青年諸子の地位が大なる幸福であると同時に、一方に於ては其責任も又甚重大なるものあるを覺る所がなくてはならぬ青年は第二の國民である。來るべき時代の組織者である。國家將來の運命は其双肩に負擔するものである而して世は益々複雑に趣き、國際間の競争の如きも歳々共に益々激烈ならんとして居る。此時に當つて金剛無缺の國体を擁護して、翻翻たる國旗の光に一層の美を添ふるは即ち青年諸子の任務である。然れどもそれは將來の事にして、今日泰平の世に於て國家は直ちに諸子の努力を必要とするものにあらずして、彼

成功は最後の一步



成功は最後の一步

の木戸、大久保、西郷の諸豪を始めとして、伊藤、井上の諸子が若冠身を挺して國事に奔走したるが如きは、直に以て今日の範となすべきものではない。抑々維新の大業は國家の一大變革にして、彼等維新の功臣は即ち亂世の風雲兒である。今は即ち泰平堰武、殊に上下の秩序整然たるものあるを以て諸子は唯教育勅語に垂示せらるゝが如く、學を修め業を習ひ以て智能を啓發し徳器を成就して忠良の臣民たることを心懸くれば即ち十分である。唯一朝事あるに際しては國民として義勇奉公の覺悟を必要とするところあるのみである。然れども社會上新陳代謝の理勢に依り、諸子の時代も亦早晚來るのであるから、此時に際して國民として大に活動し大に貢獻する所あらんことを欲せば即ち大なる準備を必要とするのである。



甲斐の庄喜右衛門長崎奉行仰せ付けられし時、

『日本の内にては、御當家(徳川家の事)亡び、他人天下を取りても、是は御一分の恥ばかりなり。異國へ日本の地一寸なりとも遺はしては、日本の恥なり、大切の事なるにつき、随分油斷仕間敷様』
(松平定信自筆雲)

其の本分を曉らんと欲せば家を思へ

忠孝は我が國國立の大本である。歐米諸國に於ては個人主義發達して著しく個人の權利を重んじ個人と國家との間に何等の制度を認めざるの結果忠孝の道も亦我が國に於けるが如く熱烈なることを得ず。我が國に於ける家族主義は文明國として除外例たる一つの特色である。祖先を敬ひ家名を重んずることは

成功は最後の一步



成功は最後の一步

吾人の服膺しつゝ、ある教訓中最も肝要なる一個條である。而して此の祖先崇拜の觀念に基く家族の制度は忠孝の道の源泉にして、吾人は實に家族主義の搖籃の裡に成長したる者である。諸子が笈を負ふて他郷の學窓に在るの時、夢魂豈馳せて家郷に入るの時なからんやである。諸子の父母も亦家に在りて只管諸子の身を思ひ、儻指して諸子の成業を待ちつゝ、あるのである。思一たび茲に至らば、誰か發奮して學に勉めざるものあらんやである。諸子にして其の本分を曉らんご欲せば切に其の家を思ふに如くはなし、家を思ひ、父母を思ひ、弟妹を思ひ、以て日々の課業を完全に果すことが出来るのであらう。

要之、青年諸子は、小にしては一家の後繼者として、大にしては一國の臣民として、自己の立脚地を明にし、併して日進月歩の時勢に注目し、以て深く



自重する所なければならぬ。而して奮闘、努力して其の使命を完ふすべきである。

雲萍雜誌に曰はく、
國家を治めんごするものは、昔より云ひ傳へたる如く「奇」の字の意あらまほし。此文字を別かてば上立んごすれば不可ならず、下可ならんご欲せば上立たず、家を治むる法亦如斯である。

◆現代の青年に與ふ

◆維新前後の青年士氣

維新前の青年には、大體三階級の別があつた。一は所謂公達ご云ふべき執袴

成功は最後の一步



成功は最後の一步

者流である。二は所謂上士云ふべき下級士族又は豪農の子弟、余の如きも其の一人である。三は即ち下士云ふべき百姓労働者子弟であつた。中に就き執権者流は優柔軟弱であつて意氣地なく、多難の際、更に社會上の威力がなかつた。下士は又、因襲的に自由向上の念慮なく、素より社會的活動を爲さんこもしなかつた。獨り上士の階級にある青年は、武あり智あり不平あり。自由奔放の思想を懐き、勇壯活潑な元氣を有し、實際の活躍も、勢力も共に最も強かつた。

彼等には理想があつた治國平天下是である。彼等には破壊すべきものがあつた。其の階級制度の打破である。王公將相何ぞ種あらんやの觀念である。斯の理想、斯の觀念あればこそ、彼等には抜くべからざる自覺があつた。自負があ



つた。勇氣があつた。斯くて王政復古に成功し、新日本の建設が出来上つたのである。

◆青年に斯の勇氣を要す

惟ふに、元龜天正の頃には、其の輩出する人物皆奇策あり。勇氣があつた。元祿年間の人物には大概悠長懶惰の風があつた。維新前の青年に此の勇氣があつたのは亂世の時代に通有した現象である。之れを泰平無事、秩序整然たる時代に望むことは無理かも知れぬ。

然しながら青年諸君が今日の世の中を泰平無事だこ心得て居るのは間違ひである。青年の或る者の中には、現代の無事單調に堪えざる如き言辭を弄する者

成功は最後の一步



成功は最後の一步

もあるが是れは大なる勳進ひである日本國內は誠に泰平無事であらう。けれども一步進んで世界の形勢を見れば奈何、實に多事多難ではないか、維新前の青年は日本國內にのみ生きてたかも知れないけれども現代の青年は、須く世界的に眼を配らねばならぬ。

今の世界の状況は維新の頃に髣髴してゐる。恰も維新の頃各藩が各地に割據して國內の紛糾を重ねたやうに、世界は今洶湧して居る正に亂世である、唯だ舞臺が廣い世界に變つてゐる云ふだけである於茲乎余は思ふ、或意味に於て現代青年は、余等が維新前に生れたと同じ境遇に生れて居るのである。唯だ舞臺が違ふだけの事である。だから現代の青年にも須らく、維新前後の青年が懐いたやうな覺悟と勇氣とを要すべき筈である。然るに泰平の逸民を以つて任じ



無事を仰つが如きは誤れり云ふべきではないか。

重大なる青年の任務

扱て、維新の大業就つて十年二十年、國內治り文物が興つた。そして歐米の文明は滔々として流入して來た。是に於て歐米主義是非の論が喧しくなつた。けれども歐米主義の是非の如きは愚論である歐米文化の漸來は維新の鴻業にも増して日本の改革を促して呉れた其の文明を吸収したればこそ、日本は日清戦争に勝ち、日露戦争にも勝つ事が出来たのである。東洋否世界に覇を稱し、今日の文化を贏ち得たのである。唯一つ、歐米の文明に伴ふ物質偏重の主義までを吸入したのが、千載の恨事であるが、是れは實に當年の青年の胃の腑が、文

成功は最後の一步



成功は最後の一步

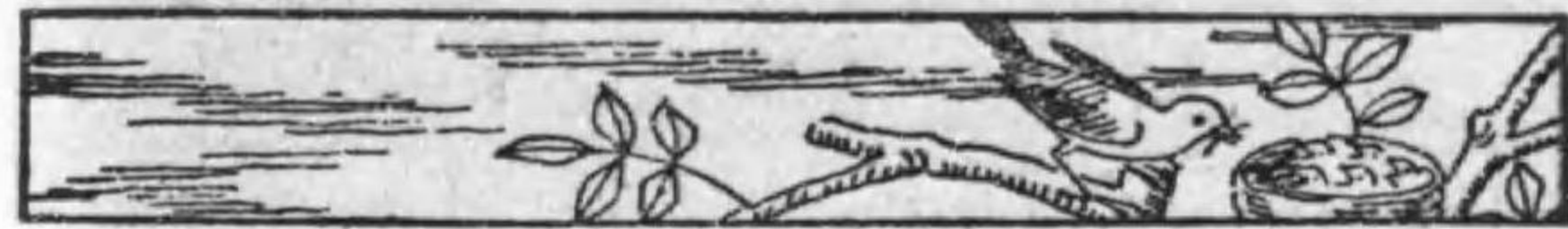
化を咀嚼する能力に缺けて居たのを示すのである。爾來青年のこの胃病は全治するに至らない。昔日の武士的、精神的氣風の弛廢して、執権者流の遊惰の風ミ、下士の卑屈な根性のみが外來の物質主義と共に不消化のまゝに残つて居る何時の時代に於ても、諸種の新しい文物思想が這入つて來るものであるが國民が此の食物を消化する役目は、取りも直さず青年に在る。第一番に外來の事物を試るものは青年である。謂はゞ青年の國民は胃袋である。日本が古來勝れた同化力を有つて居ることを誇りにしてゐるが若し今日の如く、漸次國家の胃の腑が弱つて行つたならば將來のこゝ甚だ憂慮すべきものがあらうと思ふ余は現代の青年に此の重大なる自覺を以て進み、輕々しく浮草慮忘の思想を受け入れざらんことを切望するのである。



眼を高處大局に注げ

こは云ふもの、余は現代の青年を以前の青年を比較して、現代の青年が劣つて居ることは概論しない。否、寧ろ現代の青年が諸種の點に優越して居る事を認むるものである。無論時世の變化もあることはあるが、現代の青年が取扱ふ哲學か、法律か、物理學か、總べて五十年前には思ひも及ばなかつた程精密なものであるけれども部分的研究の細に入り密に亘るに共に漸く綜合的觀念の缺乏を來した。學問の研究は誠に結構であるが、小局に齷齪して大局を見るの眼がなくなつて來た。餘りに近眼な、餘りに小利口な、餘りに利己的な青年が殖えて來た。是れ蓋し青年の罪でも、社會の罪でもないであらうけれ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

こも、斯くの如く推移するに任せて置いたならば國民生々の氣力が亡びて了ふ恐れがある。國家の元氣が消沈して行く憂がある。

此の現象は那邊に胚胎して居るか、余は思ふに青年の目的が之れを然らしめるものと思ふ維新前後の青年は、其の理想として目的する處は常に治國平天下にあつた。國家の爲めに盡すにあつた。然るに今の青年は(全部ではないが)其の目的極めて卑近である。一身の苟安の外には何物もない。恰も蝸牛が自ら殻を被つて而も一身が安全を計らうと角を振り立て、ゐる觀がある。

我々はもう小利巧な青年に飽きて居る。世間は小利巧な人間に食傷して居る青年諸君、世界は益々多事の秋である。願くば眼を大局高處につけて、國家社會の大を以て任ぜよ。



◆するなれば爲て見よとの務力

一體人世に於ける成功は如何なることであるか、金を溜めることであるか、爵位を得ることであるか。奢りを極め、權勢を擅にすることであるか。否々各自の本分天職に満足して全心全力を之に注ぎ、以て自己の全能を發揮して國家社會に貢獻する所にあると思ふ。自己の全心全力を其の職務に傾倒すれば、遂には自己業務は一つにして二ならざる、境涯に達するに至る。高尚なる人格、尊嚴なる品性云ふものは、自然に此の中より發揮して來るのであつて是れ即ち人生の成功者云ふべきものではないか。

「英國の船大工は一本の釘を打つにも、己れの打つた釘が抜けるなら抜いて

成功は最後の一步



成功は最後の一步

見よミカんで打つ、又英國の銀行には何萬圓預けても受取一つ呉れない、それで決して間違ひはない。

英國が今日の發達を來した所以は、要するに此處にあると思ふ。人々が全心を其職務に傾倒して他に餘念なき結果は、當然此處に至らざるを得ないのであつて、不正を働いたり、誤魔化したり、一攫千金を望むが如きは、畢竟天職に満足して死力を盡す云ふ根本觀念を缺如せる結果に外ならぬ。一心にその職務に熱注するの外他の邪念を交へざる人であれば、乃ち仰いでも天に恥ぢず、俯しても地に恥ぢず、自ら顧みて良心に疚しき所なく、唯だ己れの正直なる奮闘努力を以て誇りとする人であるから、自然に其の技能は上達し、周囲の信用は日々に加はるばかりで、心中の平和と愉快を以て日々を楽しく暮らすのである。各人各個が斯くの如くにして、その業務を勵めば其の國家は自然に



富豪のレイ落と重夫門番

發達し、人類全體が自然に幸福を増して行く、即ち英國の船大工の爲す所、英國の國運の隆盛なるこそ世界の第一位を占めて居る所以、明かにこの道理を説明して居るものに外ならぬのである。

若し人生の成功は金を溜めること、爵位を得ること、奢りを極め權勢を擅にすること等であつて、日々の奮闘努力は之を得る手段に過ぎずしたら、何うであらう。假りに此處に多年の努力に依つて財寶に包まれて居る者があるとする。而して其の財寶が一旦火事に焼かれ泥坊に奪られたとすれば、直ぐに丸裸になつて仕舞ふ。即ち多年の奮闘努力は水泡に歸して仕舞ふ。又茲に多年の奮

成功は最後の一步



成功は最後の一步

闘によつて爵位で光つて居るものがあるとして其の人が或る都合の爲めに其の爵位を奪はれたミすれば何うであらう。矢張り同じ結果で、最早や何處に頼る所もないのであつて、多年の奮闘努力は水泡に歸するのであるが、人間の眞の奮闘努力は決してそんな無意義のものではないのである。自分の天職を磨くことに依つて自然に高められたる品性、鍛ひ上げられたる人格は誰れも奪ふことは出来ない。如何なる事變が起るも是れだけは身に保つことは出来る。斯くしてこそ我々の日々の奮闘努力は大なる意義あるものであり、價値もあるものであり、光あるものであるこの確信が生ずるのである。

財産があり、爵位が高いミ云つてそれを當てにして奢り高ぶつて居るものは一朝事變に遇つて零落したミなれば、最早や世間で相手にするものもないけれ



ごも、縦令身分は丁稚でも、門番でもその人の平常の人格が立派であれば如何なる不意の災難に罹つても、周囲の人が見捨てない。決して災難の爲めに不幸な目を見ずに、遂には幸福に一生を暮らすことが出来る。且つ又日々正直に、熱心に、その業務を何より大切にして働くミしたならば期せずして其の人の前には、成功の路は必ず開拓せらるゝものである。

◆世の中の事は心の持様一ツ

空がよく晴れるミ、一面見渡す限り瑠璃色の青天で如何にも心地がよい。然るにドンヨリとした空合ひには気分も何ミなく鬱々として面白くない。人の心も之ミ同じく、外からいろいろの雲が往來するミ、頭がいつもドンヨリして

成功は最後の一步



成功は最後の一步

誠に不愉快である。

然らば心の雲は何うして出て来るか云ふにその原因はいろいろあるが、就中根本たるものは自分の天職、全力を注ぐべき一生の目的即ち生涯の方針が定まつて居ないからである。何うも面白くないいろいろの雲が絶えず心中に往來して、爲めに日々を不愉快に暮し従つて種々の邪念妄想にのみ心が動かされてはつきりした晴天を見ることは到底出来ず。遂には一生を醉生夢死で終るのである。

凡て世の中の事は心の持ち様一つで何うにもなる、假令ば魚を釣りに行かうと云ふ時には、平常ならば駄下を踏み込むのでさへ嘔吐を催す程の泥溝の中へでも、手を突き込んで蚯蚓を取るではないかこの仕事は自分の仕事である。他



人の爲めに働くのではない、自分は、この事業で大成しなければならぬと決心をしてかゝれば、何んなつらい仕事も自然に面白くなる。勇氣が出てつらい位は何とも思はなくなる。心の平和、良心の満足を得る云ふことは、この觀念が根本である。

心の平和、良心の満足の下に全力を注いで、一步一步に向上しつゝ進む道行きに、人生の成功はあると思ふ。即ち前途に輝く光を放つ所に人生の成功はある云ふはなければならぬ。

「假令ば、或人が自分は或る成功熱に達したと満足するところがあれば、最早や其の人の前途には何の希望もない、勇氣も起らない、即ち前途は暗である。さうすれば成功點を思ふて居る立場は、實に墮落點であつて、之れから一歩々々墮落して行くのである故に金を溜める事、名譽を得ることを、

成功は最後の一步



成功は最後の一步

云ふ様な目的物を成功點と定むることは大なる過まりであつて、唯だ心の平和を得て一心不亂に努力する所に人間の成功は存して居ることを考へねばならぬ」

天は如何なる微細なものでも之れを見透すものである。故にその業務が何であらうが、唯だ至誠を以て業務に熱中し、努力を傾注し智識を磨きつゝ、獻身的に進めば、必ず自然に光が顯はれ、幸福を開き、而して茲に全く會心の域に到達し得るものである。

⊗ 舵なき舟となる勿れ

諸子は生くる爲めに食ふか、將た食らふ爲めに生くるか。

こは、是れ今日の滔々たる俗流に對して最も適切なる詰問である。今の世何ぞ



小才子の多き即ち何等の高尚なる目的もなく志望もなく唯一日を安穩に衣食すれば即ち足るの徒輩の甚だ多きを觀る、彼等の生活は唯衣食の爲めにして目的のためにあらず。故に唯上長の命令を奉じて器械的に働くのみで、其の眼中に何等希望の光の輝くを見ずして、若し醒醒する處あらば即ち多くは阿堵物の爲めたるに過ぎぬのである。胡蝶の花を逐ふて舞ふは生きんが爲めである。

『萍やきのふは東今日は西』

こは古人の名句である。乃ち彼等の生活は禽獸草木のそれと多く擇ぶ所なきを觀るのである。思ふに人の人として尊きは其志にあり志なきものは即ち人として立脚の根底を失へるものである。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

王陽明曰く、

「志立たざれば天下成るべきの事なし、百工技藝も雖も未だ志に基かざるものあらず志立たざれば舵なきの舟、轡なきの馬の如し、漂騰奔逸何の底る所あらんや」

人はいは再び生れ再び死するここを得ざるものである、豈深々として舵なき舟、衝なき馬の如くなるべけんやである。

◆ 諸士の覺醒を促す

◆ 世界的青年たる一大自覺

日本現時の狀態は、一小島國として、封建制度の下に孤立して居つたのが、



今や正に總ての點に於て世界的となり、萬國を比べるやうになつたのである。一國然る上は國民も亦世界的でなければならぬのは論を俟たないのである。然るに現代の青年は口には世界的と云ふけれども未だ實際に其の意味を理解して居るものは少ないのである。所謂上の空にて徒らに世界的と云ふに過ぎない。斯かる有様では、國家將來の發展上大なる妨害となる事を反省しなければならぬのである。

元來何れの時代を問はず、人の義務たるものに變化のあるべき筈はない。即ち個人的普通の道理としては當然守るべき義務たる、是非か、善惡其の他正邪、曲直の根本的觀念は、何れの時代に於ても、變化すべき性質のものではないのである。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

然らば現代の青年は、此世に處する上に於て、唯世界的に云ふ言を空言に止らしめず。茲に擧つて一大自覺をせねばならぬのである。但し自覺なる問題は之れを解釋するに積極消極の二方面に分れて居るが、我輩思ふにこれに積極的に解釋して、世界の大勢を知るのが甚だ必要の事と思ふのである。

文明の發展は社會の複雑するに連れ、規模は次第に伸張し、個人よりは社會社會よりは國家、國家よりは世界といふ風に、範圍の關係は益々複雑になり、到底往昔の個人的思想や、單調なる社會的感情なきで満足する事の出来ぬやうになり茲に世界的感情、世界的義務に云ふ大なる國民間の關係が生じて來るのである。

これを一例として云ふたならば、日清戦争前と日露戦争前に於て國民の感

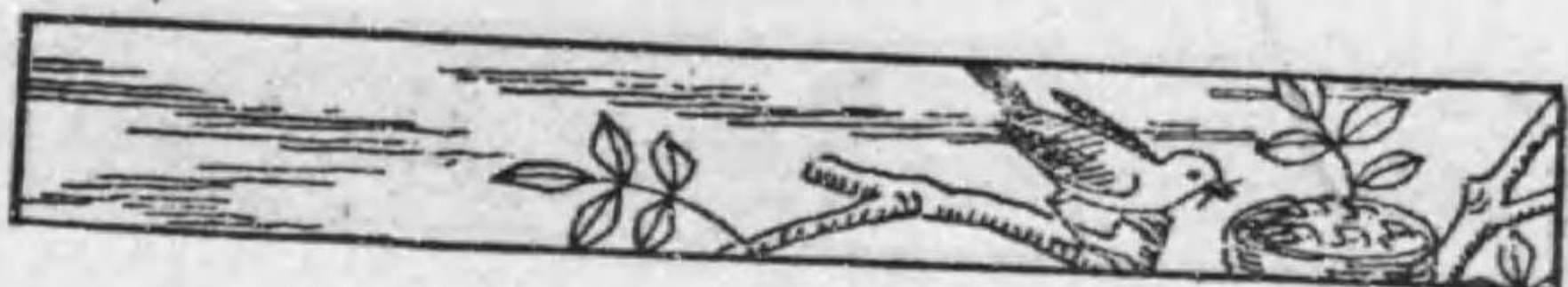


情が非常に相違して居る事が發見し得られるのである。即ち戦争の將に起らんとするや、日本は朝鮮の弱きを扶けて強きを撃ち、所謂仁義の師を出して暴を伐つたのであるから従つて其の當時の國民性には愛國心云ふものが、其の極點に達したのであつて然して一方には同盟國たる英國は勿論敵の同盟國たる佛國すら、日本の勝利を歡喜したものである。

愛國的國民性の中心點

然して此の歡迎の聲は長く續いたであらうか、否々戦争息むや、忽然として日本に對する輿望は、戦争當時の心理とは全然相反して來たのであつて同盟國の英國は勿論、五十年間始終變らずに同情せる米國は、戦争後に於て頓に同情

成功は最後の一步



成功は最後の一步

の冷却せしは事實であつた。

而して此の現象の至るべきは日本の知らざる間に、歐米各國は皆疾くに知つて居たのである。然らば獨り日本のみ知らなかつたのは何故か云ふに、畢竟日本國民殊に日本青年の時事に暗い結果云はなければならぬ、蓋し一國を形成する上に於て、政治思想と世界的眼光がなかつたならば、其の國民は既に死せるもの、何んの異なる所はないのである。國民及び青年は生命の存する處は一に此れに依つて成敗の岐るゝも最も大切なるポイントである。

換言すれば、斯かる重要な機微を知らむとするには現時の日本國民は根本的に於て、世界的大國民なりといふ、根本的の自覺の稀薄なる結果である。若し夫れ世界的知識の缺乏、世界的國民たるも要素に缺けて居るもの、云すれば、日



本の將來を危しき云はざるを得ない。

然らば眼光を世界的にして觀察したらばさうであらうか。之れを英米二國に見るに、彼の國民は個人思想の完全に發達せしものにして、例へば個人さへよければ社會國家はさうなつても構はぬか云ふならば、決してさうではない。世界を通じて、英米が愛國心の旺盛なるは、つまり活ける個人主義の發達の完全なるを證して餘りあるものである。

就中米國の如きは、共和國として極端なる個人主義崇拜せる國にして、若し一旦國家の危急に際せば、合衆國八千萬の民衆は火の如き熱情を以て國に殉ずるだけの國民となる事は、米國の歴史を繙くもの、等しく首肯する所である。萬物を通じて依つて來る處には、必ず其の中心點であるのであるが、此の如

成功は最後の一步



成功は最後の一步

米國の熱誠なる愛國的民性の中心點は青年なのである加ふるに米國の老人なごは假令年齢七八十歳に至るごも、自ら老いたりご思はぬほご活動的にして、又青春の氣性を有する國民たる故である。

世界的愛國心を發揮せよ

稱つて英國は如何に云ふならば、平和主義を唱道鼓吹せしは英國にして國民として世界に對するごきは之れ亦これほご愛國心の旺盛なる國民は世界に比ないのである。然らば之れを日本の事實に見るに悲しい哉日本國民は最早五十歳位になるご早く自ら老人を以て任する早衰國である。斯くの如くにして長き星霜を閱せしならば如何に一方の歐米は益々其の思想發



達して其の國家も愈々隆盛に赴くのは必然にして、日本は益々退歩するの傾きを來すものなるを保せざるは勿論にして國民が長く是れを自覺せずんば國家の存在も疑はる、のではあるまいか此の點は、就中青年諸君が大いに反省しなければならぬ。

國を護し世に處するは、この個人主義と國家主義のみを以て満足すべきものにあらずして、之れは更に博愛に基く世界的平和主義を加味せざるべからず世界主義は即ち公德なるものにして、公に對する德義の感念を養成しなければならぬ。

世界平和主義、換言すれば世界の人類に對する德義の觀念は零である。即ち自己の爲めには他人の利害を破壊し、自己の安逸のためには他の苦悶なごは構

成功は最後の一步



成功は最後の一步

はぬ云ふ有様である。此れは甚だ遺憾なることにして、斯くの如く偏狭なる愛國心にては未だ世界的愛國心といふ譯に行かないのである。

此の思想を養成せんせば、勢ひ此の偏狭なる思想を打破して行かなければならぬのであるが、之れに向つて力を盡して貰ふのには今日の處青年を措いて他にないのである。若し眼光豆粒の如き思想の青年ならば、未來の日本國を繼承するに十分なる資格ある青年云ふことが出来ないのである。青年諸君の努力し、修養すべき時は正に今日にあると思ふ。

即ち今日の青年に希望することは、正義人道の二大觀念を養成して貰いたいのである。此れに關せる一大佳話がある。曾て長州藩が馬關に於て米艦を砲撃せしことがあつた。其の結果は却て米艦に破られ、其れが爲め少なからぬ賞金

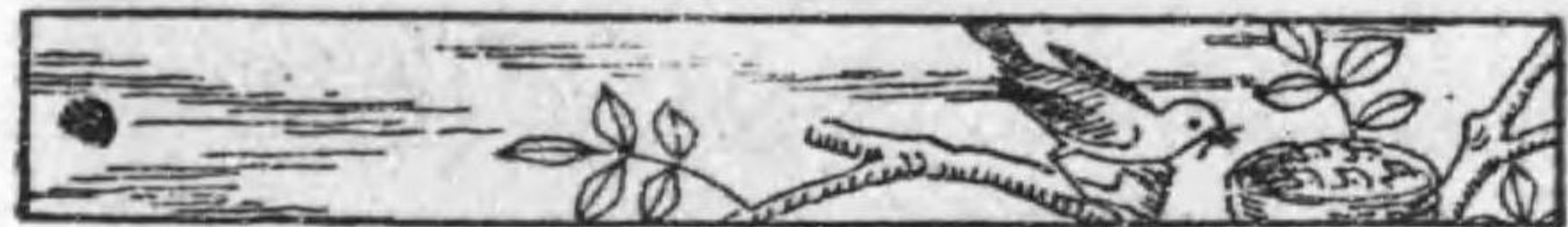


を出したことがあつた。然し此の賞金を如何に處分せしか云ふのであるが此れは實に米國の公義公德心を立證して餘りあるのである。

償金は米國に納めたが、米國の議會は之れに就て討議し曰く「此の償金は所謂強者の手を以て掠奪せし不正の金である。合衆國の正義の精神よりせば、到底之れを納める事は出来ない」と拒んだことがある。更らに討議して曰く「日本は今や學問を必要とするから、米國へ學生を送るならば悦んで迎へ、友誼として之れを教育せん」と云ふ交誼を日本に申し込んだのである。

此事たる實に米國民の正義を表はした事實ではあるまいか、苟も世界の強國として起つ上に於ては之れ位の禁懐ミ精神ミがなければならぬと思ふ。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

◆下等動物と五十歩百歩

これを要するに人道、正義、平和の三大觀念が、世界に對する最も有力なる
潛勢力なるのであつて、徒らに弱者を苦しめるのを事とするに至つては其の所
業たる實に下等動物と五十歩百歩の差を出ないではないか。

然らば此の所業を敢てするに至るには、所謂公徳の根底的觀念を扶殖し置く
の必要がある。惟ふに公徳が充分發達し、世界的智識が充分に發達すれば、斯
くの如き矛盾は自然消滅し、日本國民は世界の大和民族として四海に其の名稱
を輝かすことが出来るに信じて疑はない。其れには先づ青年諸君の自覺するよ
り他に手段はないのである。



然るに現時の此の一大責任ある青年を見るに、不幸にして我輩の目には、斯
かる思想の下に將來大に活動して見やうと云ふものは、極めて稀れなやうに思
はれるのである。其の甚しきに至るに、自然主義の風潮に驅られ、或は物質
一點張に傾く若くは徒らに悲觀して眼中大國民として日本を双肩に擔ふてやら
うといふやうな、氣概の風ある者は少ないやうに思はれる、如ふに克己心が又
た甚だ減少して居るのである。

然らば此の罪は何れにあるかと言はゞ此れは獨り青年のみの罪にあらずして
社會及教育が大に預つて力ある事と思ふのであるが、然し概して青年の腑甲斐
なきに原因して思ふ。

我輩の青年時代には誰れ一人として生活問題なきに懊惱し、煩悶するものは

成功は最後の一步



成功は最後の一步

なかつたのであつて、悉く青雲の志を抱き國家を自己のもの、やうに考へつゝ、あつたので、勢ひ膽玉の置き處なごも違つて居つたのである。これを要するに現時の青年は、前説の觀念の、世に處し國を進歩發展せしむる上に於て必要な條件なるを思はゞ、茲に擧つて一大自覺、覺醒して大和民族の名を成して貰いたいことを切に囑するのである。

此の三時期を完全に經過せよ

凡そ人間として經過せねばならぬ時期は、これを三つに大別する事が出来る。即ち青年時代、中年時代、老年時代……此の三時期に在る者は、時期に應じて夫々自己の思想を鍛冶せねばならぬと同時に實行すべき事柄も時期に依つて



異なることを知るを要する、蓋し人は素質の差あり、或者は健康に世を過し、或者は軟弱で病魔に責められ、或者者は羸弱な爲めに此の三時期を完全に經過することが出来ない。

それ等は素質の差に基く所が多いから、個人々々で考へ合はせねばならぬ。これと等しく、人の思想感情は人に依つて違ひ、時期と場合に依つても違ふから青年は青年時代、中年は中年時代、老年は老年時代に自己の思想を作ることに肝要である。

併し、一身を處する上にも、一國を處する上にも考へたこと、實行すること、一致せぬことがあり、又た時期を異にせる者の考へは徒らに計畫に終つて實行せぬこともある。具體的に云へば中年時代に考へる事が、老年に到れば實行

成功は最後の一步



成功は最後の一步

の出来ぬこゝもあるし、老年時代に無闇に考へても到底實行が出来ず。徒らに計畫のみでこの世を去るこゝもある。故に時期に應じて、實行すべきこゝを考へるのが最も適切であると思ふ。

◆現代に自惚れる勿れ

それに就き、余は今日の青年に訴へねばならぬこゝがある。云ふのは、日本が維新以來五十年の間に所謂「長足の進歩」をしたと稱せられて居る一事だ。これは一體誰れが云ふのか言ふまでもなく日本ではない。外國人である、果して然らば、それ等外國人は、如何に日本人を觀て居つたか、外國人が日本人を自己を信じて居るやうに日本人を觀察して居なかつたのである。文字、言語、



習慣、風俗、宗教、歴史、すべての色彩、すべての調子が、日本は外國と違つて、東西全く連絡を絶つて居たのである。

故に歐米人の眼には、吾等の祖國日本は、單に太平洋中の一孤島に過ぎなかつた。吾々日本人は其の孤島中に蠢爾たる一動物に過ぎなかつた。多數の外國人は慥かに、日本人は支那人よりも劣つたものと思へてゐたに相違ない。甚しきに至つては、太平洋中の諸島に住居せる種々の野蠻人と同じやうに考へて居たかも知れぬ。

併し日本人が西洋人と接觸するに到つたのは、僅か五六十年前のこゝであるから此の考へは強ち日本人を侮辱した者ではない。其れは恰度、維新前後の日本人が西洋人を野蠻視して「赤髻」だとか「碧眼」だとか云ふたのと同じで全く事

成功は最後の一步



成功は最後の一步

情を知らぬから起つた間違なのである。かう思はれて居た日本人が短日の間めきく進歩したから、西洋人の驚ろいたのも無理はないことだが、吾々日本人から見ると、それは標準を過つた評語に云はねばならぬ。

然らば日本の今日の進歩は何れ程の度合であるか云ふに、文明人としての比較をすれば、後れて居ることは云へるが、決して進んで居るまいふ事は出来な。或は長足の進歩云ひ、或は世界列強の一に列せられたまいふのは、云ふ者の間違ではないか考られる。

つまり進歩は云ひ條、歐米各國十分角力の取れる程のものでなく、單に文明の非常に後れてゐたものが、多少進歩した云ふ位のものだ。故に今日の青年は、日本は強いなき、云つて、自惚れて居られた譯ではない。將來に對



して、斷乎たる決心を確乎たる覺悟をせねばならぬ。

●さらに國家の大計を立てよ

人間は一身一家に對する考へに、國家若しくは世界に對する考へに、同時に二様の考へを持つ必要がある。換言すれば小計を立てると同時に大計を立てねばならぬ。小計は一身一家に處するの考へ即ち少年時代に於て、自己を獨立させ、中年時代に人つて家族の維持を計ることである。

それは人間の義務で此の義務を果さないものは完全な事が出来ぬ。憲法の上から見ても、法律の上から見ても、完全な權利を與へられて居ない不具者である。かく青年時代に獨立し、中年時代に家族は支持する事が小計で、これ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

は誰も負ねばならぬ義務である。

少計を拙らぬここのやうに云ふ人もあるが、少計が立たねば大計が立たぬ。先づ小計を成して後國家に對する考へを懐き、更に進んで世界に對する考へを起さねばならぬ。歐米人士の間には世界云ふ考へが普通發展して居る。例せば世界の平和云ふやうなこことに就いては種々研究を試み、萬國平和會議など設けて、學者、慈善家、宗教家、政治家などが之に携つて帝王も、大統領も俱に人類の總てに向つて盡す考へを持つて居る。

然るに此の觀念は、日本人には極めて少ない、到底歐米人には及ばない。これに依つて見るも、歐米人は遙かに日本人より進んで居る。残念ながら神武天皇以來、徳川時代の末に到るまで、吾邦には世界の爲めには愚か、東洋の爲め

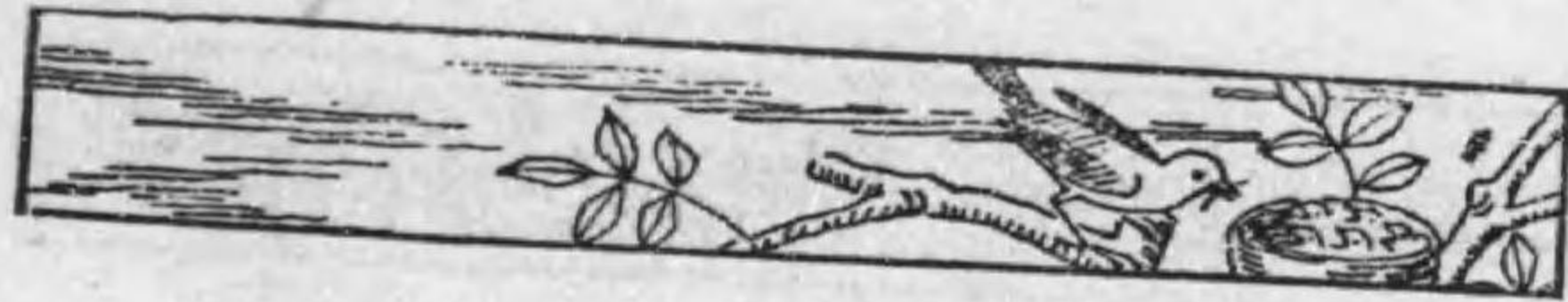


にすら盡したるものではないか。海外との戦争はあつた。併しこの戦争は、東洋の平和といふやうな考へは毛頭もなく、皆な侵略主義の結果であつた。又た學者にしても世界人類の爲めに盡くさういふやうな考へを持つたものはなかつた。

然るに明治維新以來、國民の考へが少しく發展して世界的傾向を帯んで來た日清戦役、北清事件、日露戦役の如きは、何れも東洋の平和、若くは世界の平和の爲めに起したもので、日本人のみの爲めに開かれたものでないそして其の戦争は大勝利に終つて、開戦の目的を果すこゝが出来た。

故に此點のみは先づ進んだ云ふ事が出来るけれども學者、宗教家、實業家政治家の側を見るに「進歩したか」と云ふ間に對して決して「然り」と答へる

成功は最後の一步



成功は最後の一步

事は出来ない。彼等の言論行動に徴するに世界的覺念は絶無きは云へぬが、決して豊富は云はれない。

國家に盡し、世界に盡くす考は、何うしても持たねばならぬのであるが、これは一身一家に對する考へ違ひ、青年時代から常に講究して置いて其の實行を老年時代に期すべきものである。故に青年時代に於ては一方少計を立つる同時に他方大計をも立て、對國家對世界の觀念を發展せしめ、異日、機の熟するに及んで之れを實行すべき準備をせねばならぬ。

かくしてこそ、人は人間としての完全なる義務を果し、愉快なる生活を保つことが出来るが、一身一家の利慾に逐はれて居る許りでは、蛆虫に何らの選ぶところもないのである。



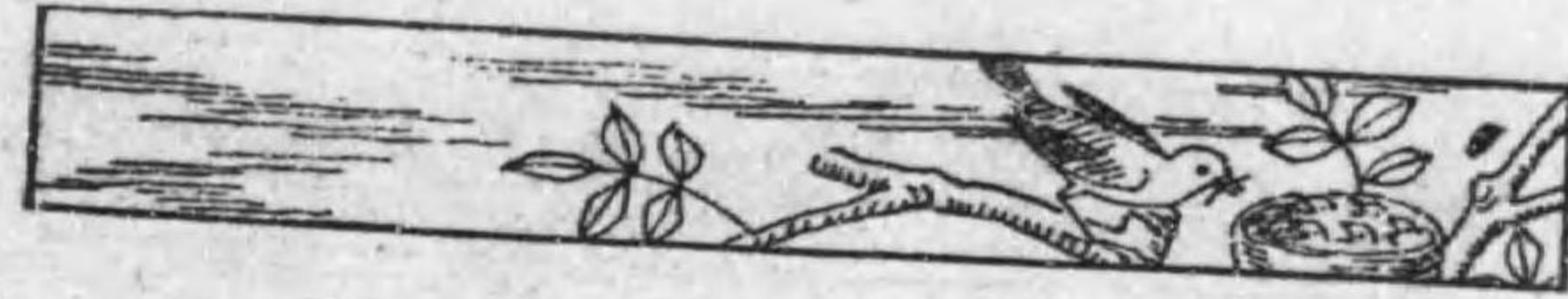
男兒の貴ぶべきは、所信の深きに在り、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、獨往邁進、雙手天關を劈て、直ちに我れ吾れを立つる所、是れこれを男兒の本領とす。

(國東)

緻密なる經濟觀念

働くには働く、儲けるには儲ける、事業は盛大にやる、身代は益益大なる、世渡り成功者の一人として賞讃される、さういふ位置に達しても、玉の盃底なきが如く、乾きし桶の水漏るが如く、堤防に蟻の穴の明いた如く、シブ／＼ジワ／＼中味が漏れては、これ一向儲けるにあつて儲からず、盛んにして衰微の

成功は最後の一步



成功は最後の一步

基、成功して不成功に陥る源である。そこで世渡りには緻密なる經濟觀念、即ち算盤玉を以て支拂ふべきには支拂ひ使用すべきは使用し、支出すべからず、又拂ふべからざる無益の事には絶対に其の支出をせぬ事が肝心ぢや、この遺練り上手を、一名勤儉の人と稱し、更らに貯蓄して不意の用意に備へるを勤儉貯蓄の人と申すのである。

勤儉貯蓄といふ事は、誠に良い事である。實に何人もせねばならぬ、良きことである。但し往々此道を過つて、勤儉の武器を吝嗇に應用し、吝嗇凝つて守銭奴となる輩あるには困る。勤儉家は守銭奴となるを教へ、吝嗇なるを意味する者でない適當の支出はこれを認めて、不適當の支出はこれを認めないものである。古諺に『女郎買の破草鞋』といふ事があるが、斯ういふ意味のものでなくて、



『女郎買はずの良き草履』を意味するのである。但し贅澤虚榮其の他豪奢に走る傾あつてはこれ汝を亡ぼし、汝の社會外に排斥される原因である。

放蕩といふは勿論不可な事であるが、飲酒の節を過り、懶惰の境遇に陥るもこれ亦此の觀念を粗雑にして、唯だ膨大なる空想にのみ耽るまきは、これも直ちに敗北の原因となる。故に實地の算盤觀念、經濟思想の上に根據を据えて、さてこれを適當に鹽梅し、投すべきは投じ、投すべからざるは投ぜず、見合すべきは見合せ、延ぶるべきは延べ、興すべきは興して、それが華美に渡らず、卑吝に失せず、虚榮なららず、枯朴に偏せず、宛かも健康なる小兒を木綿着物で育てる如く、しかもそれは垢さへ無ければ良いとして、完全に教育して行くが如き程度に致すべき者である。實力なきにあるやうな顔をし算盤も持たず、

成功は最後の一步



成功は最後の一步

經濟觀念なく、酒豪浪人的に事をなしては、忽ち失敗する原因である。「物言へば唇寒し秋の風」腹中の經濟思想もなく、成功發達の法螺を吹き、門前虚飾を張りて館中何物も無きが如きは、これ門前雀羅を張り、夜遁け逃亡、失敗の事蹟を残す光榮を有する者である。されば緻密なる經濟觀念、此の武器をふりかざして、汝の虚榮、空想法螺、豪奢、更に吝嗇、守銭奴たるを戒めよ。
松平定信曰く質素儉約は近くは救荒の爲、遠くは國家萬歳の爲の基礎なり
貝原益軒曰く、身に奉ずるこゝ薄きを儉約し、人に施すこゝ薄きを吝嗇す。

史記に曰く一狐裘三十年ミ（是晏平仲が節儉なりしを云）
米國の豪商アスター曰く、誠實なるべし、勉強なるべし。



賭博をなさざるべし

勤儉の樹で計つて出し入れよ

これが貯蓄の寶ミぞなる。
算盤の桁に合はせず架けし橋

渡りぞめよりグラ／＼ミする。

世をわたる道に財布のしめくゝり

なくて宿飯如何に食はなむ。

◆富と名譽のなかりせば

一定の職業も撰ばれて、働かさへすれば飯も食へる、熱心に労働すれば、金銭を手に入る事も出来る、經濟觀念を以つてこれを維持してゆけば、自ら發達の曙光が認められる。其の結果は物質的に満足が出来て、又聊か自己の思ふ所

成功は最後の一步



成功は最後の一步

目的とする所又志す所に趣くことを得るが、さて此の間の艱難苦勞は、凡て身體の健康、精神の活動、又其の鍛錬に待つことして、然らば是で其の道程が安全にゆかれるか云ふに、然らず、今度は積極的に、即ち表面的に、精神上道徳の觀念、事實に於て仁愛の行爲あらねばならぬ。これ宛も人體に骨を作り肉を與へたが、これより血液を與へて、其の筋肉の活動を迅速ならしめ、顔面を美しくして風采を形づくらしめるやうな者である。然らば慈悲仁愛の行爲は何んぞや。

慈悲仁愛といふ事は、誰人を恵むことではない財物を與へて他の人の喜びを買ふ事でない、施物供物を以つて他人の感謝を希ふことではない孟子の曰く側隱の情は仁の端なりと、およそ人には斯くの如き情がある、されば此の情を



事實に彰けし、仁愛の念と慈悲の心を持ちて、常に社會に盡し、また人に盡すことである。即ち君に對しては忠、親に對しては孝、兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ、以て國を愛し又博く世界を愛することである。或は惱めるを救ひ、苦しめるを助け、光りなきは光りを與へ、以て人類の幸福を増進することに勤むるのである。併し乍ら人は兎に角物質的欲望が足りて、身が安樂になる此の道徳的方面に閑却して、私利私慾に耽り、社會に害を與へて顧す、或ひは妻妾に傲り、奢侈の道に足を踏み入れ耽溺の淵に彷徨ひ、前途の行手を忘る、やうな事がある、たゞへば醫師は療費を高く食りて、仁術の趣意を忘れ、商賣は相欺きて、多く暴利を貪らんとし、官吏は賄賂の趣味を覺えて、其職責を穢すに至り、人を教ふるもの教へられんとし、人を導くもの反つて惡魔に導かれ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

利以て争ひ、慾以て戦ひ、兄弟も隣に攻ぐに至り、親族も絶縁するに至り、親子相別れ、夫妻相離れて、以て其の生活を荒寥たらしめ、家庭の温味なく、人類の情味なく無意義無趣味の悲惨状態の陥るこゝがあるやうな者である。而かも其の不徳を反省する事なく、暴虐いよく募り、悪策施さざる所なく、陽に紳士に衒ひ陰に詐欺盜賊の行爲をなし墮落の極を盡し、遂に囹圄の辱めを受くるに至るやうな者である。之らの例は世間決して乏しからず、何れも世わたる人の道に外れ、又脱線をして居るのであるが、これ慈悲仁愛の武器を知らず又其の武器が處世に最も重要なを辨へぬからである。

慈悲仁愛の武器は、人を助くる武器である。人を生かす武器である。自ら救はれ又自ら活くる道具である。およそ仁愛の行爲ある者にして、何人か其の人



を輕蔑し得べき、何人か來つて其の人に害を與へ得べき、何者の現はれて其の人に仇なすべきや、毒鬼惡魔も雖も手を下す能はず。變化妖怪聊かも其の隙を覗ふこゝは難い、それ此の武器をふりかざし、此の武器を身につけて向はんか百萬の大敵も、俄かに味方となり、千年の仇怨も一時に融解する、荆棘の籤は除かれ、坦々たる道路は現れて闇夜には萬燭の燈光燦然と輝くの慨がある然れば慈悲仁愛の行爲、此の武器に敵するものは恐らく何者もない。

そこで此の武器は、何人も普く備へねばならぬ者であるが、殊にこれを家庭に應用する事を忘れてはならぬ、家庭は世渡りの宿屋である、長い道中の休息所である。然れば此の家庭に於て、和氣霽々たらんか、道中の勞れ其の日々の難義も忘れてしまふて、更に翌日の行路に新らしき勇氣を生じる、およそ此

成功は最後の一步



成功は最後の一步

の宿屋にして不快たり、休息所にして虐待せられんか、人間は實に失望する、否反抗の心起し、更に性質が暴れ荒さんで、優美の心を失ふてしまふ、故に家庭は最も大事な場所否人生の半ばはこゝに費してしまふのである。

世には此の家庭に重きを置かず、姑は嫁を憎み、嫁は姑を恨み子は親に反抗し、妻は夫と争ひ、姉妹頻りに逆ひ、又親は子と闘ふ等醜きの限りを盡す者があるが、これらは何れも其家滅亡の基である殊に如何に財産を積み、地位名譽あるも、其家庭にして平和ならざらんか、常に風波の不安を起して、富あつて富ならず、地位あつて地位面白からず、名譽あつて反つて苦痛を感じる場合がある。

なまじひに富と名譽のなかりせば



かくうきふしはおもはざらむ

世に仁を缺き、家に愛を缺き、併せて慈悲の温さを缺く程世間に殺風景を來すこゝはない。仁愛と慈悲、これ一家をして又世間をして春風胎動、櫻花爛熳たる感を呈せしむる所以である。

慈悲の手に漏るゝ人なし灌佛會

慈悲ある人には、萬人悉く歸向する

いつくしむ親のまごゝろ身に浸みて

子らは誠の道つくすかな

慈悲仁愛の親の精神、如何に其の子をして感化せしむるよ

愛情は善き生活の最大なる基礎なり

ジョージエイオット

成功は最後の一步



成功は最後の一步

仁者は敵なし
人生愛なくんば如何

孟子
バース子

那翁の好んで誦する格言

ナポレオンの好める格言の其の一は

真正の才智は剛毅の志向なり。

云へるものなり、その平生の爲すところを観るまきは、勢力ありて疑惑なき心志を以て、功業を成就せしこを知るべし、その軍を行る時、その道路にアルプスの大山あり云ふものありしかば、ナポレオン、豈に我を妨ぐるアルプスあらんや、答へられ、新道を開きて軍旅を通せらる、これ昔より人の登



り得ざる地なり云ふ。

ナポレオンまた『不能』云ふ字は、愚人の字書に見ゆるのみ、言はれたり、ナポレオンは甚だしき勞苦を厭はず、一時に四人の書記官を用ひらる、に皆な困憊委頓せり、その他、人の力を借します、また自己の力を惜しまざるこゝかくの如し、されば其感化によりて、旁人常に新たに精神を發成す、故に嘗て

予れ、泥土より吾が大將を作り出せり。

云はれたり。然れども、ナポレオン自ら私しするの心ありたるを以て其の身を敗り、又佛蘭西を敗れり、而して其成敗の跡を観るに仁愛なきの勢力は邦國の衰運を促し、徳行なきの智識は邦國の禍根を嵩くするを知るべきなり。

成功は最後の一步

◆ウエリントン一貫の精神

英國のウエリントン、ナポレオンに比すれば、遙かに優れる大人物なり、獨り剛毅堅實忍耐なるのみにあらずして、私慾を除き去り良心に従ひて事を行ひ眞實に國人を愛せり、ナポレオンの志す處は榮冠に在りて、ウエリントンはネルソンと同じく職分の字を以て護身符として終始一貫せり、彼れが平素の書簡中に榮冠の字は一も見る能はずして、職分の字は屢々見るころなり、然れども、誇大の言語を以て之を逐ひ出だせるもの一もあらず苟も極大艱難の事に逢ふも雖も、泰然としてこれに當り、更に躊躇狼狽することなしベニンシユラルの役に於て、ウエリントンは困苦拂逆の事を受けたること大方ならず。若



し他人ならば或は怒りてその任を去り、或は狂病をも發する所なるべきに、彼のウエリントンは、久しくこれに耐へ、細心熟慮して難事を處置し、而して能く大功を成就したるは獨り大將の才略を顯はすのみならず、又相臣の度量を具へたるを見るに足れり。

ウエリントンは、其の性怒り易き血性の人なりしが、善くその職分を盡さん、欲するの志篤きが故に、その怒を懲して、遂に非常の忍耐の力を生ぜり且つその尤も稱すべきは、一毫も矜高自大の心なく、貪吝の念なく、下劣の嗜慾なかりしことなり。蓋し大將となりては、その勇決神速、ナポレオンの如くクライヴの如く、相臣となりては、その智慮あることコロシウエルの如く、その純粹誠實にして高尚なることは、ワシントンに似たり。洵にかくの如く一人





成功は最後の一步

にして種々の才徳を具へたるは、實に問世の豪傑なり。

◆果斷速進

邁往の志ある人、多くは果決神速に事を作すなり、彼のレドヤドは、亞米利加有名の旅行家なりしが、或る時アフリカ會社にて、「何れの日までに旅裝備辨して亞弗利加に發足し給ふや」と問ひかければ直ちに答へて「明朝」と云ひけり。

ブラツシヤの大將ルーカルは、その快捷なる故を以て三軍よりマーシャル、フオルワド(勇往の元帥)の綽號を得たり。

ジョン、ジェルヴァイスに問ふ者ありて「準備具はれり、何れの日に出し



給ふや」と云へば、「即刻」と答へたり。

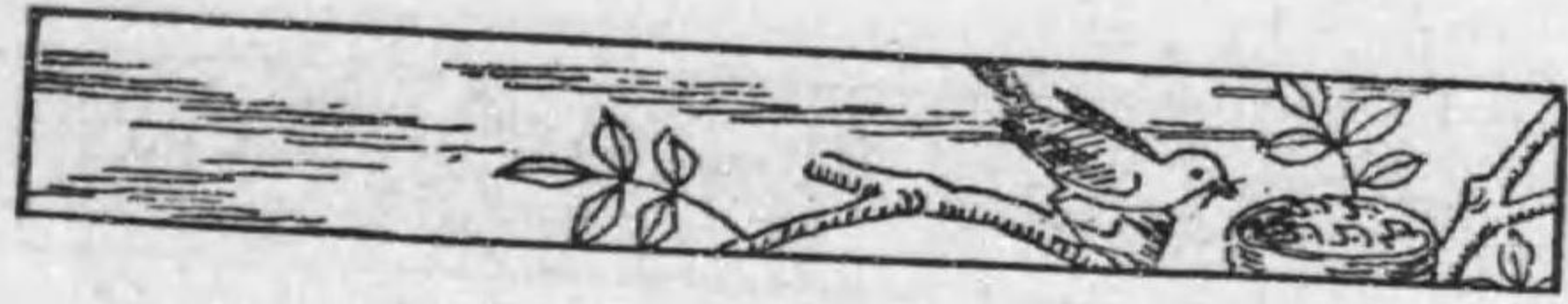
コリン、カムアベル、印度に向ふ軍中の總督に任せられし時「何れの日に出發するこゝを得らるや」と問はれければ、「明朝」と答ふ。

嗚呼、以上の諸將の如きは、その奮烈勇往の志氣あるこゝ斯くの如し、其の功名を成したる、豈怪しむに足らんや。

◆常識の樹ある山は貴し

物事は何んでも發達して居らねばイケない、發達して居らぬこ伸ぶべき樹木の縮み歪める如く以つて完全なる用をなさない常識も斯くの通りでこれが發達して居らねば、兎角世の中の事が不明になつて、一寸した事でも理解する事が

成功は最後の一步



成功は最後の一步

出来ぬ。オイ水は冷い者であるか、温い者であるか、火は熱い者であるか、又涼しい者であるか、問はれた時に、諸君は何んぞ答へるか、水は冷きもの、火は熱き者、判断するのが常識で、火は冷きもの、水は熱きもの、答へるが、非常識、又水を温むれば熱く、水は減すれば冷かなりといふは常識で、水は氣温によりて變化す、地温高き時は、水温高く、地温低き時は水温又低くし、等答ふるは、専門的智識に屬する者である、心頭火を滅すれば火亦冷かに、心頭火を焚かば、冷かなり、雖も熱し等答ふるはこれ高等智識に屬するものである。されば常識とは、此の有觸れた事を有觸れた儘に判断するの智識で所謂時代に適應したる識見又偏せず固ならざるの智識である。しかもそれが發達して居らぬ、或は途方もなき觀察をなして、不可解の答を以つてし、或は専門的、又哲學的高



等の智識を以て、判断し返答するやうになる、これではさうも即時世の中の間には合はぬ、敏活に事を捌いて行く事は出来ぬ社會の事々物々刻々に現はれる現象に就いて、其の適切なる處置をなして行く事は出来ないのである。矢張り世の中は余り六つかしくなく、何人にもわかるやうに又判断せられるやうに、如何にも御尤も様、感心せしめて渡つて行くやうにせねばいけない、秩序ある社會に於ては殊に然りである、超然たる智識は此の常識あつての上に必要な者である。

常識が發達して居れば、事を未然に知る、時代の趨向を察して時機を知る、故に先んずれば人を制す的の勝利を博する、宛かも旅路をゆく、前途の險惡難嶺の所在を知り、晴雨の天候を察して、臨機應變の所置をこり得るやうな者だ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

されば發達せる常識は進歩の魁をする。

世の中には、所謂、才物といふ者がある、才智に長けて居るこいふ人がある如才ないこいふ人がある、これらは多く此の常識の發達せる人のうちより出づる者で、さうも常識が發達して居らぬこ、此の才智が出ない、抜目があつていけない、才がなければ使用する人も少く、又自ら事を處理して行く事も難く知らなければ人の上に立ちて事を爲し、又社會の優勝者として行く事が出来ぬ。されば發達すべきは常識である。

發達せる常識は、物事を足元より見てゆく、事業を眼前よりなして行く、理想の高等のこ、空想に近き計畫を立てずして、實地の手腕、實地の利害より打算して行く、巖上に空を睨みて雲の去來を眺むるやうな事をなさずして、山の



麓より川に沿ひ、橋をわたり、谷を越え坂を上りて、其の頂に達するこいふ順路を取る、突飛無鐵砲なる事をなさずして、何事も周到なる用意の下に、痒い所へ手の届くが如き順序を以て發達の方法を講じる、馬車馬の如く跳ね廻らす牛の歩えのよし遅くこもこいふ形式をこる、着實にして眞摯、眞率にして直裁簡明なる態度をこる、事務の才が出来て經營の手腕が生じる、整理の能力を養つて、紛糾せる事件を解決をつけて行く、狂せず慌てず驚かず、熱せず、又冷やかならず、中正柔和の温情を保有し出さずして、秩序あり、規律あり、又階級を守り、能く艱難に耐へて又總てに不満を抱かぬ人を作る、不満を抱いて直ちに満足に至るの道を履行する、およそ秩序あり、平和ある社會にありてはこれら常識あり殊に其の發達せる人によらずんば、其の社會の維持は難い。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

常識を發達せしむるの法は、先づ腦を冷やかにし身體の運動を充分にして、血液の循環をして良好ならしめ、深きよりも博き智識を求めるところである。而して頭腦を敏活にし、其の見聞せる所を以て判斷し、應用し、總て即時其の良心に問ひ可否の斷案に習慣をつけることである。世間を廣く見、物事を潤く知れば、自ら判斷の材料に富んで、偏頗の思想を養成せざるのみか、圓轉滑脱以て處世の妙を盡するに至る、或は逆腹を立てず愚圖を捏ねず、誤託に並はず不徹底なる議論を吐かずして、着實穩健なる思想を養成し、以て常識の發達を促すに至るれば見聞の博識、これこそ常識發達の滋養食料品である。

百聞は一見に如かず、可愛い子には旅をさせよ、こいふも此の常識養成の爲で、百聞の一見は一面に實地の見聞を獎勵する者、可愛い子に旅をさせよも亦



同様である、故に宜しく博く求めて博く聞き博く探りて博く見、博く學んで博く知り、博く考へて博く應用するのは、是常識發達の教育法である、發達せる常識、此武器を持つて居れば、汝は社會に優秀なる地位を得ること同時に、世間は又汝の如き道具を所持せるものを歡喜する。

淺間山火を噴く眺め偉けれご
それじや頭に毛が生えぬぞへ

常識の樹ある山こそ貴むべきである。

◆信仰はあらゆる知識の極度なり

世間の事は何事にも道具を要する者じや、飯を焚くにも、先づ水桶より米洗桶、柄杓に籠、飯櫃に杓子、焚釜より米櫃の用意までしてかゝらねばならぬ、

成功は最後の一步



成功は最後の一步

庭右一箇を勤かすにも、金槌の必要もあれば或は荷ふ道具も要る、引き起すに繩の必要もあれば、埋むるに穴を穿つ道具も入用じや、されば、此の世渡りにも徹底せる信仰といふ道具が必要になつてくる。

信仰といふ事は、信心である、又信念である或は得たる確心である、是は斯うご定め行ふ事である但しそれが何れも意志徹底し、迷ひの境を脱した者ならでは不可である。信仰といへば、單に宗教上の信仰のみと思ふ人もあるが、これはさうでない。信仰は何れにもある、事業にもあれば、目的にもある希望にもある。意志の貫徹上には、殊に必要である。耶穌を信じ、佛を信じ、又神を信じ或は儒を信する、それは其の人の御勝手に何んでも良い、鯛の頭も信心から、心が其の一事に向ふ時に當つては、敢て何種を問はず又何人の容喙をも許



さない。陽氣發する處金石も亦透る、精神一たび到らば何事か成らざらん、此の境地を指すのである。

徹底せる信仰は、物事に成功せしめる、人を動かし社會を動かすの力がある西に國あり信じて、コロンブスは亞米利加大陸の發見をなし、此の事成し得べし信じてワシントンは獨立の軍を起した、しかも皆成功して居る、是徹底せる信仰の上に、其の迷はぬ處があつたからである。一意専心、思ふ念力岩さへ通すのである。

迷ふといふ事は、大體信仰が足らぬからである。即ち材料が不足だからである。今宗教を信じ極樂の道に達せんとするに、其の宗教其の極樂に至るの智識が缺乏して居つては、此信仰の念は起らない故に斯ういふ場合は、凡て其の智

成功は最後の一步



成功は最後の一步

識材料を求めて、其の信仰に資する事であるが、信仰したならば決してこれを變えぬ事である、即ち不變不動の位置に坐する事である、世に不動尊云ふ佛のあるは、此の一意専心、不變不動の意味を現はしたもので、此の信仰の妙境に達せんか、不動明王ならずとも、其の御利益あるは、必定の事である、水火も辭せず、艱難を厭はず、正義の劍を揮つて世の中に立たんとする、活ける不動明王、汝は成功者の一人となる。

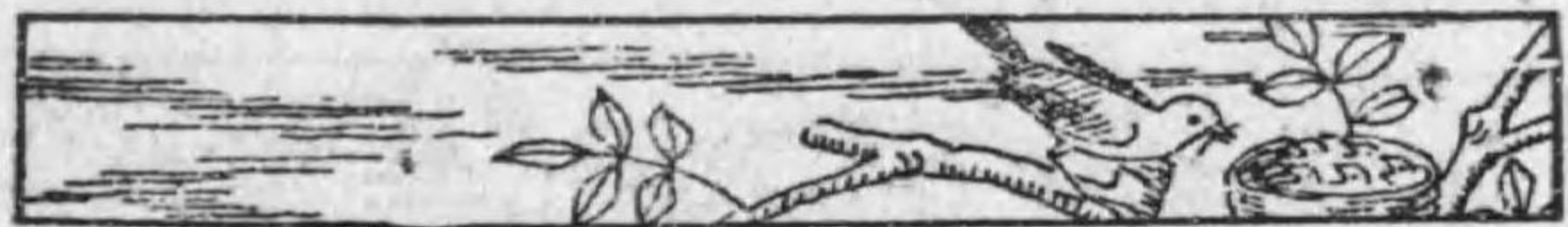
信仰といふ事は、物に確心を與ふる、事物に安堵を與へて、人を信じて安心致さしめる、故に宗教は此の所を主眼として神を信ぜよ必ず天國に生れて、我れを信ぜよ、もろくの悪業を除かしめん、佛を信ぜよ、地獄に至る人も我れこれを救はん、信ぜよくと教へてゐる、これを信すれば精神が常に其の所に



至りて、外の罪惡を考へず安心立命する故に、自然極樂の淨境に往するこゝを得るに至るからである。故に信すべし、信すべし汝の事業を信ぜよ、汝の力を信ぜよ、汝の目的を信ぜよ、汝の希望に迷ふ勿れ、悉く信じて其の事業をなせよ。

世に失敗する人の多くは、此の信仰なきに始まる、即ち迷ふが爲めである。今始めた事業も、少しく風向きが悪いと、此れでは如何に危ぶみ、充分慣れた事でも世間の潮流が大浪小浪の動搖を押かぶせるに、ハテ参つたり寂滅淨土、再興如何に氣力を失ふ、これでは信仰が薄いものぢや、七轉八起、寝たら起きろい起きたら寝るじやこれが浮世の腕試し、目的は目的、希望ぢや、此の一心此の一念押通さで止むべき者か、戀色この道ではないが、死んだら蛇にな

成功は最後の一步



成功は最後の一步

る安珍清姫の執念位信仰があるべきものじや、此の位信仰があるに水にザンブリ日高川、波をけたて、泳ぎゆく、女の姿に苦勞はない難境、如何なる、苦患竹の柱に茅の屋根、手鍋さけても、信じた同志、厭ふ心は起るなく、安心氣樂の其の中に、以て目的を果す事が出来る、信仰は實に處世成功の大武器ぢや。呼安心立命、此れ人間が世に處する最後の目的である。此の目的に達せしむるの武器汝信仰よ汝は最も尊く、又最も偉大なる重要武器である。信仰はあらゆる智識の極度なり、其の端緒にはあらざるなり。

ゲ エ テ

◆勇あれは知を啓き、知あれは勇を練る

吉用大藏は百歩にして柳葉を射る弓術の達人たるに同時に、智略群を絶して



才氣喚發、壯年二十五歳にして既に加州金澤藩の才物を以つて衆庶の矚望を負つ、ありしが、ある時一人の修業者が彼れの聲名を聞き傳えて訪ね來り、其の技倆を斷はん事を申し入れた、大藏は謙遜辭を低ふして首肯せざりしが、修業者は頻りに之れを所望して己ます、遂に自ら一寸五分の強弩を取り出し。

「先づ槐より始むべし」

壯語しつゝ、庭前に直立せる周圍三尺に餘れる槐樹に對ひ、一聲鋭く切つて放てば、矢は唸りを發して難なく其の幹を貫きたり。

座に在る所の大藏の門人等は、修業者の精悍なるに舌を卷き、心私に其の成行を氣遣ひしが、大藏は神色自若、殊更に其の技神に入れるを感服せる風を装ひつゝ、猶四方山の話に託して弓を執らず、聽て夕陽西に落ちて、時正に黃

成功は最後の一步



成功は最後の一步

昏に垂んたる頃、静に立つて床の間に立て掛ける白木の弱弓を取り寄せ、
「然らば御所望に應じ拙技御覽に入るべし」

こ、修業者に一揮して立ち上り、弓を満月の如く引きしほりて、兵を放てば過
たず、美事に同じ槐樹を射抜きて、矢は向ふの籠に立つた。

強弓と弱弓、優劣の懸隔も亦太甚しき武器を以て、同等と云はむよりは寧ろ
前者に優るこも劣るまじき効果を收むるに到つては早や既に其の技を比較評
するまでも無い、自ら天下の強弓を以つて任じ、如何に名聲噴々たる大藏なれ
ばこて、やはか我にはこ自負し來り、其相見るに及び大藏の逡巡するを、畢竟
我れを恐る、者こなし益々天上天下唯我獨尊の自尊心を、彌が上に漲らした修
業者の鼻先は、這の一矢の爲めに美事に根こぎに挫折せられて、彼れは這々の



體で逃げ歸つた。

跡に門人等は溜息吐いて打喜び、大藏が玄妙の技を噴々賞讃して己まなかつ
た。

大藏は莞爾こして、

「彼程の業、玄妙呼はりは過褒の至りなり、先試みに其幹を見よ」

こ指されたる槐樹の幹を、門人等相寄つて検め見るに、不思議や射抜きたる孔
は唯一つ！

打顧みて怪訝かる門人等の顔を見て、大藏は崩る、許り大笑しつ、座に延き
て静に曰く

「抑も周圍三尺に餘れる大樹を射抜くこ云ふこは、強弓の力こ雖も尙且つ難

成功は最後の一步



成功は最後の一步

しこする所にて我白木の弱弓等にては、逆も射通し得らるべきものならず、然れば、余は晝の間に彼れが射抜きたる孔を見定め置き、薄暮の暗さに乗じて再び其の孔を射たるに、修業者は之れを悟らず、自ら膽を潰して勝手に逃げ歸りたるなり」云、聊かも自負する色なく、猶語を次ぎて戯談を交へつ、勇あれば智を啓き、智あれば勇を練る文武の訓戒を諭された云ふ、誠に大藏の如き智勇兼備を士に云ふべきである。

完全成功する道

凡そ世に處するに當つて此の誠實位必要の武器はなく、此の一心位物を成就する者はない、誠實あつても一心足らず、一心あつても誠實足らざれば以て完



全に成功する事は出来ない、又如何に外の武器が完全しても、此の誠實と一心といふ武器を缺いては、宛かも佛作つて魂入れざるの類、人形案山子の様なものである、しかし精神の訓練をなし、徹底せる信仰を抱き、慈悲仁愛の行爲ある位ならば此の誠實と一心に缺くる所ないのであるが、さて人間は中々さうはゆかない、學問をして居つても其の誠實の足らざるあり、信仰は懐いて居つても、時に不誠實の所爲を爲す事がある、又慈悲仁愛の行爲にも偽りを含むことがあり、徳望あり精神教育ある人にも、時に一心を缺くることがある、されば一心と誠實、これ車の兩輪の如き武器であつて又總ての武器を活かす所の講虎ならば其の眼睛ぢや誠實と一心は、學問なき人にも所有することが出る教育なき人にも、此の武器は携ふる事は出来る愚人、聖人、智者、無智者、

成功は最後の一步



成功は最後の一步

身分を問はず、職業を撰ばず、階級を論ぜず、肖不肖を云はず、其の男子たるも、其女子たるも老若壯衰の差別なく如何なる人も此れを得る事が出来て、しかも此の武器があれば以て安全に世渡りする事が出来る、只智あれば其の高きに登り才あれば其用ふる所廣きが如く其の他の武器悉く備はれば社會の上流に位し衆人の中に際立ちて優秀なる生活をなすこゝを得るのであるが、これ等の武器悉く備はれざるも此の誠實一信心これがあれば多く人より信用を得て自ら他の武器を得るに至る宛かも誠實一點張の下婢一心に働く下男が重用されるやうな者じや。

世には非凡なる手腕を有するも此の誠實を缺く爲めに轆轤落魄の境遇に陥り目的盡甚だ時宜に叶ふも一心に熱を缺くが爲めに其の事成らず若くは他の信用



を失ふ事がある、善策智謀如何に余りあるも、此の誠實一信心を缺かば忽ち敗北せん。

心だに誠の道に叶ひなば

祈らずも神や守らん

菅 公

- 孟子 曰く 誠は天の道なり、
- ワシントン 曰く 誠實は最良の方便なり、
- ビーコンスフキールト 曰く 誠實は大徳なり、
- 蓮如上人 曰く 一心に彌陀を頼まん者は必ず極樂に往生す、
- 日本俚諺に 曰く 二兎追ふものは一兎を得ず、
- 英國俚諺に 曰く 二人の主を持つ豚は必ず餓死を免れず、
- 土耳其俚諺に 曰く 船長二人あれば船を沈没せしむ、
- 蘇老泉 曰く 一忍以て百勇を支ふべく、一靜以て百靜を靜すべし、

成功は最後の一步



成功は最後の一步

こ、あれば誠實せいじつ一心しん、これ成功せいこうの楔くわである。

誠實せいじつなき人は憐れんむべし、

一心しんの針路しんろなくんば世渡よわたりりの船ふねは着つかず、

貞女ていじよ二夫ふに見まえざるも、其そのの貞操ていそうの一ひとを全まふせんが爲ためめに、刀鍛冶かたやじが精神せいしん潔けつ

白しろ一場いちじやうに閉籠へいろうつて、更さらに他たを顧かへりみざるも其そのの刀劍たうけんの出来でき榮えいを良好りやうかうにせんが爲ため

である、誠實せいじつなれ、一心しんなれ、

誠實せいじつは、一、自己じこを欺かかず、二、他たを欺かかず、一心しんは自己じこに克かち、慾よく

望ぼう誘惑ゆうわくに堪たえて、一意いちい勇往ゆうわう邁進まいしんするこゝなり、

良心りんしんの提灯ていとうに照あらさば不誠實ふせいじつの虚偽きうゐを去さり得えべし、

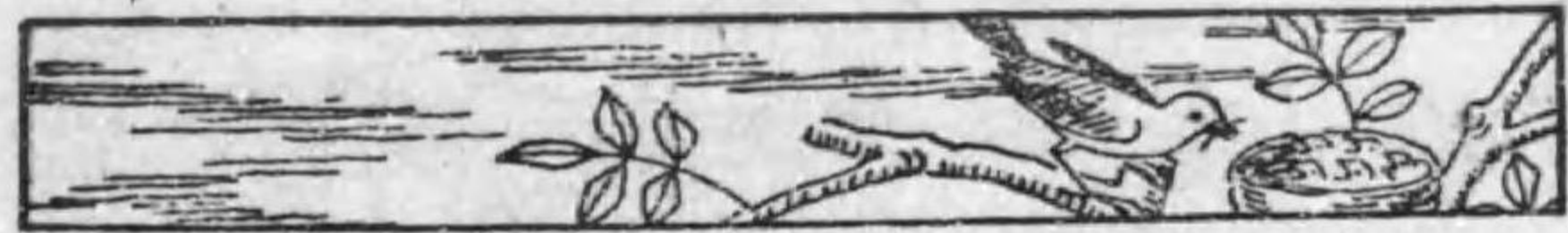
多岐たきの名雲なぐもを掃はひ、一心しんの光明くわうめいは輝かがき得えべし、



先見の明萬機を制す

河村瑞軒かむらみずけん未だ名なを成なすに至いたらず、深川ふかがわの陋屋ろうおくに蟠居ばんきよして蠢々しゅんしゅんとして爲なす事ことなく、僅わずかかにして生計せいけいを立てつゝありし頃ころ、ある夜打鳴ようちなす摺杓鐘すりはんすうの音ねに慌あわだしき人音ひとねに熟睡じゆくすいの夢破ゆめやぶられ、素破すわく火事かじよこ騒起さわぎ一番いっぺん、直ただちに屋上やうじやうに攀登かまのぼつて火ひの手てを視みれば火かは同じ深川ふかがわの一隅いちごくより出いでたるらしく猛火炎まうかえん々々しんしんとして天てんに沖おし、折せ柄か怒號どごうせる風伯ふうはくに力ちからを得えて縦横じゆうけうに暴威はうゐを振ふるひ、忽たちまちにして附近ふきん一帯いちたいの地ちを鳥有とりありに歸かへり、火勢かせい猶熾いさ然ぜんとして八方はつぱうに蔓延まんえんし、將軍家しやうぐんけ御膝元おひざもとの大繁昌だいはんしやう、八百八町はちひやくはちまちの大江戸おほい江戸を、紅蓮くわんれん大紅蓮おほいぐわんれんの火ひの海うみに埋没まいぼつし去さらむ光景こうけい、凄すままじくも亦怖またおそろしき限りであつた。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

瑞軒斯く見えて莞爾ニ笑ひ、

「永年連添來りし貧乏神も此火に恐れて遁去せん、予が開運の時節こそ到來せり」

ミ、何事をか目論見けぬ、有合せたる僅少の金を懐中に捻込みたるま、聽ては共に灰燼ニなるべき我家を捨て、晝夜兼行して木曾山に馳來り、名ある樵夫頭を尋ねて其の家を訪ひ。

「予は大江戸屈指の材木商なるが、這般巨額の商品を仕入れの爲めに來りしなり」

ミ、申し入れた。

瑞軒は洗ふが如き多年の赤貧に處しながら、悠々として迫らず、時たらば一



朝にして此の手に巨萬の富を握るべしと顎髭撫で、嘯きし豪懷は、自ら其の風俗に顯はれて、容貌頗る溫雅一見して豪商の主人たるに恥ぢざれば、樵夫頭は好客御參なれど打喜び、奥に請じて名物の蕎麥なご打ち、歡待至らざるなき折柄、偶々此の家に六七歳ばかりなる兒あるを見、好餌須く利用すべしとて、私かに小判一枚を取り出し、火箸にて孔を穿ち紙捻を通し、玩具ニ稱して其の兒に與へぬ。

此の態を見たる樵夫頭は、其の豪奢に膽を潰して呆れ返り、

「如何に大江戸の人なればとて、小判を兒童の玩具に與へらるゝとは、如何さま富貴大悠の仁なるべし、我も忠勤を勵むて多大の恩賞を與からん福の神様を粗略にするな」

成功は最後の一步



成功は最後の一步

細君に命じて愈々歡待を厚からしめ、自己は出で、東奔西走只管材木の買占に骨を折りぬ。

瑞軒窃かに策の中りしを喜び、此の家に集りたる多くの木材を悉く買ひ取るべき約を結び、材木には一々烙印を打ち、倍財布を敲きて五兩の金を置き、「至急に輸り給はるべし、代金は着荷と同時に御渡し申さむ、這は些少なれども當座の手路なり」云ひ置きて、其の身は急遽歸東して俄に一僕を召し抱へ材木の到着を待ち受けぬ。

火は果して瑞軒の豫想に違はず、炎々三晝夜に亘りて天を焦し、江戸の大半を慘憺たる焦土に化せしめたるの爲め、到る處材木拂底の聲高く従つて、價格は宛も鰻登りの暴騰を示せしより、瑞軒は材木の到着を待つて深川にて難市を



行ひ、彼れが理想させる如き巨萬の富を一朝にして握占め爾來好める道に身を投じ、終生晏然として衣食に事缺かざる、安樂の基礎を作りぬ、時、明暦三年の秋、彼れが大經世家として天下に名を成すに先づ事、六七年以前のこゝであつた。

公務は私憤の爲めに捨てず

大賢は愚の如し、大勇屢々憶病を誤らる。坂田金時此の間の消息を語つて曰く「勇士になるには須らく憶病の眞似を爲す可し、怯えながら膽力を練るべし」を穿ち得て至妙の言であるまいか。

木村長門守重成、ある時浴室よりの歸るさ、誤つて茶道何某の脇差を足臑に

成功は最後の一步



成功は最後の一步

かけた。坊主は見るより忽ち赫怒し、

「重成殿。無禮なりッ」

ミ呼びながら、手にせる扇子を揮つて重成の面を續けさまに打ち据えたり。

居合す諸士は、素破一大事、重成もても兩刀の手前、武士の意地豈夫此儘に

捨置くまじミ、場所も忘れて騒ぎ出せしが、當の重成は神色をも變へず、徐

に打たれたるを瘡を撫でながら笑つて曰く。

「茶道、それにて其の方の心は癒えたか、脇差を足蹴にしたるは重成の失なれ

ミ、武士の面を打ちたる上は、其の儘にして差置く可きにあらず、是非も一

命を申受くべき所なれミ、重成は公務云ふ重き責任あり、況てや大事の目前

に迫れる折柄、私怨の爲めに其の方如き小敵ミ争ふこゝを好まねば、此の儘に



許し遣すべし生命冥加の茶坊主よ」

ミ、嘲笑ひつ、悠々己が詰所に退去つた。

これを聞傳へたる城中の諸士は、重成は憶病にして一命を惜むを以て、言を

左右に托して争鬪を決せざるものミ推し、誰一人重成の態度に服せず却つて其

の卑怯の振舞を指弾しつ、ありしが、聽て慶長の戦ひ起り、重成大阪陣中に在

つて智勇拔群の名將ミ唱はれ數度の激戦に疾驅し曾て一回の敗れも見せず其の

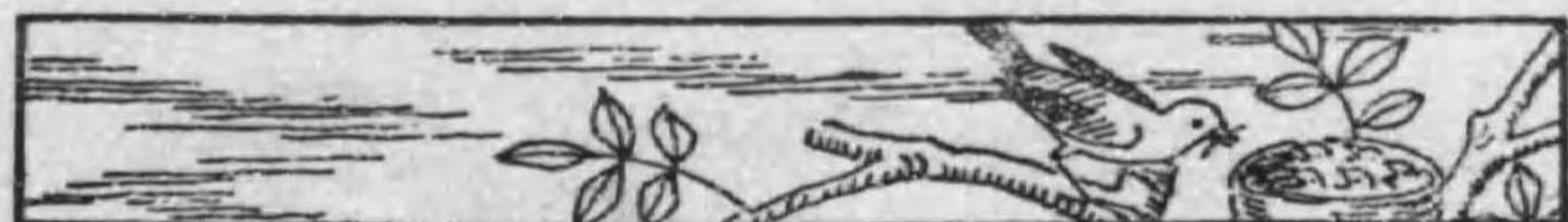
和睦整ひて秀頼家康ミ盟書を交換す時に臨み、大阪の諸將等一人ミして其の使

節に當らむ云ふものなきを、重成は自ら進んで之れを勤め、單身敵中に入り

て少しも恐るゝ色なく味方に充分有利なる盟約を訂したるのみならず、元和の

役に再び大阪方の大將ミして花々しき偉勳を建て、遂に秀頼の馬前に一命を落

成功は最後の一步



成功は最後の一步

し光榮ある有終の美を收むるに及び曩に誹謗したる人等始めて重成の剛毅沈勇に嘆服し、慚汗を流して其の靈に謝したり云ふ。

◆明治年間と大正年間との差異

如何なる時代にも愉快あり、苦痛あり、亂世にも笑ひ興じ、治世にも流涕して長大息すれど、史を讀むの間、或る時代の好ましく、或る時代の好ましくからざるを感ず。足利義政の頃、畫家に雪舟あり僧に一休あり單に山名細川の競争に惱まされしに非ざれど、太閤時代の愉快なるに若かず、徳川十一代將軍は大御所の世にして全盛を謳はれしも、後より顧みれば、彼の如き時代に生存したく思ふ者の少からん、エリザベス時代は愉快らしく、クロムウエル時代も興味



あれど、チャールス二世及びジェームス二世の治世は、生存するの不幸なりと思はる、當時の人は相應に愉快を感じたらんも、後より顧みて好ましくからず感ずる時代に生存せし者を、不幸なる部類に編入せざるを得ず。ヴキクトリヤ六十餘年の治世は、平和と光榮を以て過ぎ、或は空前絶後と言へりしが、エドワード七世も、平和と光榮を以て過ぎ、現帝ジョージ五世も、然じく然るべし、獨國は維廉一世の下、ビスマルクありモルトケあり、一時の隆盛を極めし如くなれど、後ち少しも衰へず、年々益々隆連に向ふを見る、佛國は之れを違ひ、拿破翁一世敗軍の後、多く愉快を感ずべき無し三世の治世は虚榮の時代ながら、幾分の愉快を感じ、ガムベツタの議場に疲呼せし間、尙ほ意氣の壯なるを認めしも、爾後退守を専らにし、貯金に汲々し、或は屈して大ひ

成功は最後の一步